

『平家物語』初期生成と藤原定家(下)編纂の視点から (林日出男教授 柴公也教授 吉田良夫教授 退職記念号)

著者	尾崎 勇
雑誌名	熊本学園大学文学・言語学論集
巻	27
号	1
ページ	176-224
発行年	2020-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00003356/

『平家物語』 初期生成と藤原定家 (下)

—— 編纂の視点から ——

尾崎 勇

(七) 『言泉集』・『熊野道之愚記』・『建礼門院右京大夫集』 (承前)

物語には、前章(五)でふれたように山門の衆徒が神輿を放置、帰山したので、神輿は祇園社に入れたと描かれていた。そこに「彼社ノ別当権大僧都澄憲二仰テ、秉燭二及テ奉レ入レル」(屋代本・巻一「日吉神輿入洛事 付頼政振舞事」とあり、澄憲の名がみえる。この白山事件で、天台座主の明雲が配流される場面が、覚一本では「澄憲法印(中略)僧正心ざしの切なる事を感じて、年來孤心中に秘せられたりし、一心三観の血脈相承を授けらる。」(巻二「座主流」とあるのに対して、屋代本は「一心三巻ノ法門并二血脈相承ノ譜ヲ授ラル」(巻二「先座主明雲罪科儀定事同配流事」と相違する。「血脈相承」とは「法統を師から弟子に伝えること」である。^{註34)}とすれば、「血脈相承」は不当であった。^{註34)}「大納言大夫藤井松枝」と俗名を付けられた明雲が、あわただし別離の情況のもとで、厳肅な『摩訶史観』の観法の「血脈相承」は修せないからである。屋代本にあるように「譜」すなわち「各宗列祖伝来の奥旨を伝授する証として、列伝相承の名を記した文書」のみを授けとした方が実情になっている。『玉葉』寿永元年(一一八二)十一月二十八日条に、

酉の刻導師参上す(澄憲僧都)。即ち事始む。説法優美、衆人涙を拭ふ。

と記載されており、信西の七男の澄憲(一二六〇～一二〇六)は平治の乱で父の奇禍に連座して、下野に配流された後、

京の一条の里坊安居院を拠点に唱導を行う。しかも二条天皇崩御の時に歌も詠んでいるのは、定家との関連から興味深い。父の俊成の『編纂』した『千載集』(哀傷・五八九)にみえ、屋代本と同系統の百二十句本にも、

少納言入道の子息澄憲、御葬送を見たてまつり給ひて、泣く泣くかうぞ申されける。

つねに見し君がみゆきをけふとへばかへらぬたびと聞くぞかなしき

(巻一・第四句「額打論」)

と載っている。澄憲の説法の文案を『言泉集』として「編纂」したのが澄憲の子の聖覚(一六七〜二三五)であつた。清水宥聖は「安居院流の唱導書が『平家物語』の作者の机上にあつたことは容易に想像される。」と論じている。^{〔註35〕}

澄憲は頼朝の母の四十九日法要に出向き、聖覚も政子の追善の導師として鎌倉に下っており、父子は幕府へ影響を与えていたのである。また本物語の創出に聖覚は直接に関与していく。^{〔註36〕}(九)章で後述するように幕府御家人の宇都宮頼綱(入道蓮生)の女と定家の嫡男為家との間に生まれた為氏、その為氏の子である為世に師事した頼

阿は『井蛙抄』(巻五)で「澄憲と聖覚とは風情ははなはだかりたれども、ともに能説の名誉あり」と讃えており、安居院流として繁盛していく。『明月記』建保元年(一二三三)一月二十六日条に「聖覚僧都の弁舌、聞く者涙を拭ふ。」とし、死病の床に伏した聖覚の許に赴いた定家は、『明月記』文暦元年(一二三四)二月二十一日条でも、

廿一日。巳の時許りに聖覚法印安居院房に向ひ、其の病を訪ふ。濁世の富楼那遂に遷化をなすの期か。実には是れ道の滅亡するか。悲しみて余り有り

としており、釈迦の十大弟子のうちで説法に最も優れていたと伝えられている富楼那にあたと痛嘆し、嘉禎元年(一二三五)三月五日に聖覚は寂した当日の条には「……事切れ給ふと云々。日来聞くと雖も、臨むに由無し。悲しみて余り有り。」と慟哭し、翌月の四月二十二日条では、

(聖覚) 聖法印法事(中陰の間、顕宗を請はず。只、慈賢曼荼羅供、遺言する所なり)。

施線にあるように慈円に師事し、寛喜二年(一二三〇)九月より法性寺座主になっている慈憲が追善供養をした。慈円周辺圏が法性寺であつたので看過できない。そのうえ、『明月記』建久三年(一二九二)三月十六日条から嘉禎

元年（一二三五）四月二十二日条までには、「聖覚」の名が八十回も記載されている。^{〔註37〕}定家は三十一歳から寂する六年前の七十四歳までにあたるので、頼朝入洛の年の二十九歳で従四位下に叙せられた二年後から、ほぼ終生聖覚とは親密に交わり続けていく。

聖覚を、まず本物語が創出した慈円圏の西山の空間からみていこう。『愚管抄』に、平治の乱の勅発をめぐつて、

大方信西ガ子ドモハ、法師ドモ、数シラズオホカルニモ、ミナホドくニヨキ者ニテ有ケル程ニ、コノ信西ヲ信頼ソネム心イデキテ、^{（中略）}義朝・清盛トテナラビタルニ、^{（中略）}信西ガ子ニ是憲トテ信乃入道トテ、西山吉峰ノ往生院ニテ最後十念成就シテ決定往生シタリト世ニ云聖ノアリシガ、男ニテサカリノ折フシニシアリシヲサハヘテ、^{（増）}「ムコニトラン」ト義朝ガ云ケルヲ、「我子ハ学生ナリ。汝ガムコニアタハズ」ト云ラキヤウナル返事ヲシテキカザリケル程ニ、ヤガテ程ナク當時ノ妻ノキノ二位ガ腹ナルシゲノリヲ清盛ガムコニナシテケルナリ。コ、ニハイカデカソノ意趣コモラザラン。

（巻五——三六〇二七ページ）

二重施線で優秀な多くの子息に恵まれていたと信西を捉えて、施線でその子息の一人が出家して「信乃入道」と称した是憲（一二三七〇七七）を義朝が婿に望むが、そのことを信西はことわつたとまず叙述した。ところが、今一人の子息の成憲（成範）を清盛の女婿に信西はしたので、義朝から信西は恨まれ、信西一族は不運に見舞われて「子ドモ数ツクシテ諸國ヘナガシテケリ。」（巻五——三九ページ）と叙述している。『法然上人伝』（四十八巻本）に、

聖覚法印申されける事思合られ侍り、西山の善峰に^{（註38）}してを^{（註39）}はりをとる。名号をとなふること九遍、上人すゝめて、「いま一遍」とおほせられければ、高声念仏一遍して、やがいきたえにけり。上人つねには、「浄

土の法門と遊蓮房とにあへるこそ、人界の生をうけたる思出にては侍れ」とそおほせられる。厭離穢土の心もふかく、欣求浄土の行も、まことありける故にやと、ありがたうとくぞおぼえ侍る（巻四四）

信西の第十一子の是憲は平治元年（一二五九）佐渡国へ配流されて、出家した。出家名は遊蓮房円照であつたわけだが、実線を施した個所で源空が「常日頃、往生浄土の教えと遊蓮房円照と現世で出会えたのは、人としてこの世に生まれた幸せであつた」と述懐したとみえるからには、是憲は浄土宗の教義の枢要に据られている。『法然

上人伝』の波線の「西山の善峰」では憲が往生したと摘記したのと、『愚管抄』の施線の「西山吉峰ノ……決定往生」とが全く一致している。さらに『伝』には、

最後の所労の時、安居院の聖覚法印のもとへ消息をつかはしけり。其状云、「後世のつとめには、なに事をかせむずるとひと申候はゞ、一向に念仏申せと御勧進あるべく候。智者にておはしませば、世間の人さだめてたづね申候はむずらんとて申候也」云々。

(巻四四)

とあつて、最期が近づいた憲は、施線にあるように聖覚に対して書状を送付したのは括目に値する。

聖覚の「編纂」した『言泉集』と慈円圈で創出した『治承物語』を遺存させている屋代本を対比してみよう。

本物語には、平家一門から離れて高野山にいる滝口入道のところで出家した維盛が熊野参詣後、勝浦の浜の宮から那智の沖へ舟を漕ぎだして、今わの際にもなお妻子への愛執が断ち切れないと思いを訴えるので、維盛に滝口入道が教えを説く。その維盛が念仏を称えながら入水して往生を遂げる直前の場面は、

サレトモ出家ノ功德ハ莫大ナレハ、先世罪業皆滅シ給ヌラン。百千歳百羅漢ヲ雖ニ供養スト、不_レ及ニ出家ノ功德ニハトコソ申候ヘ。縦人有テ建_二七宝塔婆ヲ_一事、高サ雖_レ至_二三十三尺二_一、一日ノ出家ノ功德ニハ不_レ可_レ及。一子ノ出家スレハ、七世ノ父母皆成仏トコソ申候ヘ。

(屋代本・巻一〇「惟盛高野登山并熊野参詣同入水事」)

となつてゐる。この説法そのものの言辞は、『言泉集』(通世・三帖之三畢)の「出家釋」のなかに、

又云若放_二奴婢一人_一令出家_一功德猶無量如四天下中満_二阿羅漢_一百歳供養上起_二七寶塔_一高至三十三天_一不_レ加一日出家功德又云以一日一夜出家功德_一二十劫不墮_二三惡道_一又云離六千六百六十歳_一三途苦_一又云一子出家七世父母皆得脱_一云々

(中略)

書本云承元四年四月卅日於_(飯)飲室谷菴室以圓詮房本書寫了

聖覚三十四歳_(四)

一 了了

とあり、照応している。しかも施線の年月日は、西山に慈円圈が組織されはじめる時と全く一致している。この「承元四年四月卅日」の年月日は本物語が創出時期と重なるのも看過できない事実なのである。

維盛が入水往生するまでを、やはり『治承物語』を遺存させている屋代本で窺つていこう。まず、

サル程二岩田河ヲモ渡給。此川ヲ一度モ渡ル者ハ、惡業煩惱、無始罪障ノ消滅スル成物ヲト、憑敷ソ被^レ思ケル。漸ツ、サシ給ヘ共、日数経^レハ本宮ニカ、グリ着テ、先証誠殿ノ御前ニ参リ、法施進セテ、御山ノ様ヲ拝給ニ、心詞モ不^レ被^レ及。(中略) 中ニモ、古郷ニ留置シ妻子安穩ニト、被^レ祈ケルコソ、厭^ニ浮世ヲ入ニ実道ニ給ヘ共、猶妄執不^レ尽ト覺テ悲ケレ。

とあつて、維盛が妻子安穩を祈つた。物語の熊野三山(本宮大社の証誠殿・速玉大社・那智大社)参詣をめぐる展開そのものは、定家が建仁元年(一一〇〇)十月五日から二十七日に亘つた後鳥羽院の熊野御幸に随行した時の日記のたちをとっている『後鳥羽院御幸記』と通称されている『熊野道之愚記』(以下、『愚記』と略称。)にある。

物語と『愚記』十六日条に、熊野三山の中心である本宮すなわち「証誠殿」に参拝し、

御前に参る。山川千里を過ぎ、遂に宝前を拝し奉る。感涙禁じがたし。

と定家は感涙にむせぶ。熊野権現の本地の阿弥陀仏であり、浄土へ導く冥衆であつたことによる。翌日の十七日条でも、

御前に参り、心閑かに礼し奉る。祈るところは、ただ出離生死、臨終正念なり。

と念じた。真摯な定家の浄土信仰心が看取されよう。一方、維盛が入水していく物語の一節にも、

弥陀如来ハ、一念十念ヲモ不^レ摂、十惡五逆ヲモ導ト云悲願坐スマス也。(中略) 三位中将忽翻ニ妄念ヲ一、念仏數百返唱ツ、遂ニ海ヘソ入給フ。

と象られている。さらに『愚記』には「また遼海を眺望す。興なきにあらず。」(九日)・「眺望はなはだ幽なり。」(十日)・「海を眺望す。」(十一日)・「山海の眺望、興無きにあらず。」(十九日)とあつて、山の高台から眺める光景を讃

歎している。物語の「自^レ其船ニ乗テ、新宮ヘソ參給フ。拜^ニ神藏ヲ^一給^ニ、岸松高聳テ、嵐破^ニ妄想ノ夢^一、滝水清ク流テ、浪灌^ニ煩惱垢ヲ^一覽ト覺タリ。」とか、

比ハ三月廿八日ノ事也ナレハ、春已ニ暮ナントス。海路遙ニ霞渡テ、哀ヲ催ス類也。奥ノ釣船ノ浮又沈又、波ノ底入様ニ見ルモ、我身ノ上トヤ被^レ思ケン。

として、沖合の船を鳥瞰しながら、入水往生していく維盛の形象とやはり近接する。五体王子の一つとされる重要な王子である発心門王子に定家は参詣した。『愚記』の十五日条に、

十五日 天晴

天明の後、(中略)この門柱に始めて一首を書き付く。門の巽の角柱なり(閑所なり)。

恵日の光前に善根を懺^く

大悲の道上の発心門

南山の月下の結縁力

西刹の雲中に旅魂を弔^{さいせつ}ふ

いりがたきみのりのかどはけふすぎぬいまよりむつの道にかえすな

この王子の宝前に、殊に信心を発す。紅葉風に翻る。宝前の上に、四、五尺、木隙無く生ひ、多くはこれ紅葉なり。

とあるように、漢詩で、仏の知恵の前で自己の罪業を覚えるが、それは改心することだ、熊野本宮の途上にある発心門の月の光のもとで、仏と縁をむすび、往生できるようにと西方浄土にかかる雲を見て、旅にある私の心を慰める、と念じた。さらに「いりがたきみのりのかどは……」の歌では六道輪廻させないようにとしてくださいと懇願もした。このように発心門王子で詩を作ったり、歌を詠じたりした定家の文事は、物語にも、

大悲擁護ノ霞ハ、聳^ニ熊野山^一、(中略)感応ノ月無^レ曲、六根懺悔ノ庭ニハ、妄想ノ露モ不^レ結。(中略)「本地阿弥陀如来ニテ坐マスナレハ、摂取不捨之本願不^レ誤、必西方浄土ヘ迎給ヘ」トカキクトキ申給。

漢詩のような語句が配されるときにも経文そのものを維盛が唱えたと描かれているのと、確かに『愚記』とは類同している。

物語では那智籠りの僧が通りかかり、後白河院五十の賀で青海波を舞っていた維盛の華やかな往時を思い出し、

「糸惜や。コゝ也ツル修行者ヲ、何ナル人ヤ覽ト思タレハ、小松三位中将殿ニテ御坐ケルソヤ。(中略) 嵐二句フ花ノタクヒニ、風ニ翻ル舞ノ袖、照ニ一天ヲ耀レ地程ナリ。(中略) 我モ人モ申シニ、移レハ替ル世ノ習コソ悲ケレ」トテ、涙ニ咽ケレハ、諸ノ僧共モ皆、打衣ノ袖ヲソ洩リケル。

とあって、今の惨めな維盛を見て悲嘆したと描かれている。そのこともあって、維盛の形象を「いわば憔悴の美学に作者その人が陶醉している。」と武久堅は評した。^{〔註58〕} この武久の言説から想起されてくるのは、谷山茂の、

『平家物語』はもはやかの『栄華物語』ではない。それはすでに仏教的道義的因果律の原理でしばられている。(中略) 余情妖艶美の世界にまで分け入った新古今歌人は、平家の滅亡期のあわれさの現実に対して

は、どのように対応したのであろうか、またそれをどのようにふまえて新古今的主体の確立に役立てたか。

(中略) 要するに、新古今集と『平家物語』は、果たして互いに隔絶した二つの世界のものと言い放っただけでよいかどうかの反省に出発して、むしろ広く中世文学の時代性から、意志の文学^{〔註59〕}というところに両者の接点を求め……(中略) 中世という時代の美意識をさぐるための一の方法ではあるまいか。

との鋭い分析であって、施線の「仏教的道義的因果律」は、『愚管抄』にある、

内外典ニ滅罪生善トイフ道理、遮惡持善トイフ道理、諸惡莫作、諸善奉行トイフ佛說ノキラくトシテ、諸佛菩薩ノ利生方便トイフモノ、一定マタアルナリ。

(巻七——三七七ページ)

との言辭とも相似するし、慈円が創出させた本物語では、華やかさも横溢させる「世継物語」の始発の『栄花物語』の系譜にある同時代史を対象にした『今鏡』を承けつつ、それを切り返しなら、「武」で縁取ることに特色があるのとも結合してこよう。波線の「意志の文学」との指摘を重視したい。『愚記』の七日条では、

厩戸王子に参る。即ち宿所に馳せ入る。(中略) 戌の時ばかり、召しありて参上す。御前に召し入れらる。二首を講ぜらる。たちまち定めありて書き直され、題の次第、雪を先となす。例のごとく読み上げをはんぬ。御製またもつて殊勝なり。

愚歌、

暁初雪

いろくこのはのうへにちりそめてゆきはうづまずしのゝめのみち

山路月

そでのしものかげはうちはらふ山ちもまだすゑとほきゆふづく夜かな

希有々々

読み上げをはりて、人々詠吟す。即ち退出す。

宿所の厩戸王子で歌会が開かれる。その模様を考察した吉野朋美は「当座歌会以前に、定家はまず後鳥羽院の前で自詠二首を被講し、すぐにそれに対する論評と判定がおそらく後鳥羽院からあり、題(の順番)を直された後、いつものように読み上げた、ということになるのか。(中略) 設題に定家がかかわっていたことも読みとれるのではないだろうか。」として定家が侍した熊野御幸は「院の、和歌繁栄をもたらす我が治世の安泰、撰集成功への祈念である。それを承けた定家が、途次の当座歌会で、折にふれて祝言を詠み、この御幸での院の志向を具体化して呈示してゆく。」との見解を呈示している。^{註40)} この言説は、廟堂での今後の政治行動の先駆けを評している。

さて、八日では、厩戸王子から、次のような経路をたどっている。すなわち、信建一之瀬王子・宇麻目王子・地藏堂王子・中山王子・山口王子・川辺王子・中村王子・吐前王子・日前宮・満願寺・和佐王子・平緒王子・那口王子・松坂王子・松代王子・菩提房王子・祓戸王子そして藤代王子であった。当日八日の松代王子では、

次いで松代王子に参る。盲女あり、子を懐く。

幼児を抱いた盲女の痛々しい情景描写は、妻子を思慕しながら山中を彷徨する物語の維盛の形象と同質である

う。それは『新古今集』編纂にたずさわる二十年前の「定家の若き日の胸中をうかがうに」として、谷山茂が「若き日の定家たちにとって、平家一門のかつての日の栄華の姿が現実界における妖艶なるもののむしろ第一印象と残った(中略)一朝にして西海の藻屑と消えた平家のあわれさもしみじみと味わっている。(中略)ここにはじめて新古今的妖艶美の世界が形成された」とした視点とも通じるからである。^{〔註11〕}ちなみに藤原宗忠(二〇六二〜一二四二)が、遡ること一世紀近く以前にやはり熊野参詣をして、『中右記』天仁二年(一一〇九)十月二十五日の条に、

此邊有^二盲者^一、從^二田舎^一參^二御山^一者、聞^二食絶由^一給^レ食、

食べるものがつきてしまつてうづくまつている盲人に食糧を与えている。やはり悲惨な状況であつた。『愚記』では目の見えない女が子供を抱いていた状況を記載したわけだが、それは病氣治癒をはじめとしての現世利益の祈願であつたからに他ならない。^{〔註12〕}印象深い松代王子で実見した親子の模様を心魂に刻んだ歌人定家は、「余情妖艶美」の歌境へ至るひとつの因子になつたと推察される。物語の維盛像とも通じてくる。しかも、出家した維盛が「古郷二留置シ北方^二、此有様ヲ見ヘモシテ角ナラハ、思事アラ^二ン」と述懐していたわけだが、「北方」とは定家の長姉である後白河院京極の娘であつた。この結縁関係は、本物語の創出に参画する定家をみていくうえで顧慮されねばならない。

後章(十二)でふれるように、四条天皇の外祖文すなわち執政の「臣」である九条道家の意向をもとに定家が「編纂」した『新勅撰和歌集』の依拠資料である『建礼門院右京大夫集』の二一五番歌の詞書に、

また、「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」とて、人のいひあはれがりし。いづれも、今の世を見聞くにも、げにすぐれたりしなど、思ひ出でらるるあたりなれど、きはことにありがたかりしかたち用意、まことにむかし今見る中に、ためしもなかりしぞかし。さればをりをりには、めでぬ人やほありし。法住寺殿の御賀に、青海波舞ひてのをりなどは、「光源氏のためしと思ひ出でらるる」などこそ、人々いひしか。「花のにほひもげにけおされぬべき」と、聞しぞかし。(中略)かずかずかなしともいふばかりなし。

施線では口にして気の毒がったと記載しているので、物語の維盛像と近似していよう。さらに

西山なる所に住みし頃、身のいとまなきにことづけてや、ひさしく音もせず。枯れたる花のありしに、ふと、

訪はれぬはいくかぞとだにかぞへぬに花のすがたぞ知らせがほなる

(二六八)

が、この『建礼門院大夫集』に刻み入れられている。施線を「西山にある住居に住んでいた頃」と訳した本位田重美は「母の死後、右京大夫はだいたい兄の尊円とともに慈円の庇護の下にあった(中略)ここの「西山なるところ」が善峯寺の僧坊であったと推定してほぼ間違いないと思う。」と批評している。^{〔註63〕}しかも、この詞書の筆致から、文治五年(一一八九)頃より西山在住は「一時的でなかった(中略)やはり善峯寺の僧房にいたこともあったのである。」と推定されてもいる。^{〔註64〕}とすれば、作者の右京大夫と慈円とは同年齢の三十五歳であり、平家一門の悲運を語り合っていたことであろう。西山の慈円園から『建礼門院右京大夫集』も看過できないことを付言し、(十章でさらに定家との関連から『建礼門院右京大夫集』を論じることにはしたい。

(八) 熊野別当湛増の虚実と藤原俊成

建仁元年(一一〇一)七月に和歌所が置き、『新古今集』編纂への第一歩が踏み出した後鳥羽院は、その三ヶ月後の熊野御幸に定家を随行させた。『愚記』の同年十月十二日条に、

次いで三鍋王子に参る。これより昼養ひの所に入る。食しをはりて御所に参るの間、御幸すでに出御。この宿所より師の布施、忠弘をもつてこれを送り遣はす(絹六疋・綿百五十両・馬三疋)。

施線にあるように定家は我が家人の藤原忠弘を介して「師」に篤い施与をした。「師」とは田辺別当と称した二十一代熊野別当湛増(一一二九-九八)の子の湛顕であり、予てより昵懇にしている。^{〔註65〕}そもそも「師」とは壇越と冥衆の間をとりもつ役目なのであって、前章(七)に掲出した『愚記』同年十月十七日の条から判然するように

定家は真摯な浄土信仰心の持ち主である。この日に参った「三鍋王子」についてみていこう。定家より二十歳上の従兄の藤原経房（二四三～二〇〇）が京の自邸から、定家が院の熊野参詣に随行した時より四半世紀以前の承安四年（一二七四）九月二十一日から熊野に赴き、『吉記』同月二十七日には、

申刻参着切目王子行里神楽、止宿同社以東、権別当湛増儲宿所并雜事、於切目王子、奉書一切經之六行、上人之勸進也、如此便之結縁、各々雜注而已歳、

とあり、切目王子で里神楽が行われたので拝観した経房は、湛増と出逢つて、

廿八日壬子 晴 三鍋海福寺有書養、浴鹽水、申斜着田邊湛増法眼房、

写経等の仏事善業をした翌日には「三鍋王子」の海福寺で休息をとり、本物語に描かれる「湛増」の房舎へ出向いている。熊野に赴く以前の十五日条にも、

細馬一疋并甲冑色革撞權類等色目在判、送熊野権別當湛増許、近日在京之故也、本宮師也、以史基兼為使、

殊有感悦之報、

経房は施与しており、施縁にあるように、まさしく「湛増」は「師」であつたので、定家の血族は湛増父子の壇越なのである。^{〔註66〕}定家は経房の病疫を見舞い、物語にも頼朝の腹心として、経房の生涯が描かれている（屋代本・卷二「源三位頼朝日本国惣大将惣地頭被補事」）。このことも顧慮せねばならない。

俊成は久安元年（一二四五）十一月二十三日に従五位上、左京権大夫の職に就くのは仁平二年（一二五二）十二月三十日であつた。仁平元年春より仁平三年秋にかけて俊成が「編纂」した「久安百首」があり、そのなかに釈教歌の五首を配した。すなわち、

華嚴

朝日さす高根の花はにほへどもふもとの人はしらずぞ有りける

方等

ききそめし鹿の苑には事かへて色々になるよものもみぢは

（八八六）

（八八七）

般若

雲もみなむなしととくに空晴れて月ばかりこそすみまさりけれ

(八八八)

法華

はるかにもほひけるかな法の花後の五百とせ猶さかりなり

(八八九)

涅槃

をしむかな月の御かほも影きえて鶴のはやしにけぶりたえけん

(八九〇)

歌論『古来風躰抄』で目指していく「歌の深き道を申すも、空・仮・中の三諦に似たるによりて、通はして、記し申すなり。」(上・二)が萌芽しており、中国天台宗の開祖である智顗が唱えた三つの真理のことが詠じられている。その思想は、周知のとおり、実体がないとする空諦という否定的な視点・仮諦というさまざまな原因と条件とが寄り集まることによつて一時的に成り立っているため存在しているとする肯定的視点・空諦と仮諦のどちらにも偏らない中諦という真実のあり方はその両方を超えたところで統一する視点、との三つを指すのである。一首目の『華嚴経』に着目して次の章(八)で論述するように、背馳する文学と仏教との両立・統一を目指していく。当然のことながら天台僧慈円の歌には濃厚であり、『新古今集』に採られた、

述懐の歌の中に

全大僧正慈円

願はくはしんばし闇路にやすひてかかげやせまし法のともしび

(一九三)

では、現世の迷いの闇路と仏法のともし火とを合一させて詠じている。俊成は、当該歌を「まことに涙あやしきほどに覚え侍べれ。(中略)愚老が心願やゝおこる所のおもむき也。」(『慈鎮和尚自歌合』)と絶讃したのであった。

天寿元年(一一五四)正月二日に俊成は昇殿、翌年十一月十日には内昇殿を許され、その一年も経過していない保元元年(一一五六)七月二日には保元の乱が勃発するわけである。『愚管抄』で慈円の揚言する「武者ノ世」の幕開けなのである。俊成に「久安百首」の「編纂」を指示した崇徳院は政治クーデターを謀ったものの敗北、同月二十三日に配流されて、配所で崩御してしまった。その思いを家集『長秋詠藻』の「さきだたむ人はたがひに尋

ね見よ蓮のうへにさとひらけて」(五八四)の歌の詞書に、

……虚しき舟を漕ぎ離れ波路遙かに隔てつと聞きし別の悲しさはたとへむ方もなぎさにて、海人を刈るてふ藻塩草書きても遣らむ、方なく虚しき空に仰げども心ばかりや松山の嶺の雲にもまじりけむ、ただかたみとは、とどめおきし、……

と悼んで、崇徳院を追慕したのであった。他方、崇徳院を制した後白河院側の平清盛も熊野詣している。そのことは『愚管抄』別帖の七十八代二条天皇の在位する治世に、

此間二、清盛ハ太宰大貳ニテアリケルガ、熊野詣ヲシタリケル間ニ、コノ事ドモヨバシ出シテアリケルニ、清盛ハイマダ参リツカデ、ニタガハノ宿ト云ハタノベノ宿ナリ、ソレニツキタリケルニ、カクリキハシリテ、「カ、ル事京ニ出キタリ」ト告ケレバ、「コハイカマセンズル」ト思ヒワツラヒテアリケリ。子ドモニハ越前守基盛ト、十三ニナル淡路守宗盛ト、侍十五人トヨゾ具シタリケル。コレヨリタバツクシザマヘヤ落テ、勢ツクベキナンド云ヘドモ、湯浅ノ權守ト云テ宗重ト云紀伊國ニ武者アリ。タシカニ三十七騎ゾアリケル。ソノ時ハヨキ勢ニテ、「タバヲハシマセ。京ヘハ入レマイラセナン」ト云ケリ。熊野ノ湛快ハサブライノ数ニハエナクテ、ヨロヒ七領ヲ弓矢マデ皆具タノモシクトリ出テ、サウナクトラセタリケリ。

(巻五——三九三〇ページ)

清盛勢に湛快は鎧や弓矢を進呈したと叙述されている。その理由は湛快の妹は平忠度の妻になっているので、清盛は湛快に心をよせたからであった。熊野三山の長官を「熊野別当」と称するわけだが、十五代長快の後、嫡男の長範が十六代、弟の長兼が十七代、その弟の湛快が十八代へと別当職へと順次、交替していく。その後、長範の子孫を「新宮家」、長兼の子孫を「岩田家」、湛快の子孫を「田辺家」と名乗り、同族のあいだで三つの家にそれぞれ独立をきたして、互いに競合する時局を迎える。そのために家のあいだで別当職をめぐる主導権を争うことになっていった。湛快の子である湛増は、保元の乱で勝利した後白河院や頼朝に後年信任される吉田経房に接近し、「武家」・「武門」として「田辺家」の威勢の増強を目指していく。^{〔註67〕}そのことを物語に、

そのころ、熊野の別当湛増は平家に心ざし深かりけるが、なにとしてか漏れ聞こえたりけん、「新宮の十郎義盛こそ、高倉の宮の令旨賜はつて、美濃、尾張の源氏ども触れもよほし、すでに謀叛おこすなれば、那智、新宮の者どもは源氏の方人をぞせんずらん。湛増は、平家の御恩天山とかうむりたれば、いかでか背きたてまつるべき。那智、新宮の者どもに矢一つ射かけて、平家へ仔細を申さん」とて、ひた兜一千人、新宮の湊へ発向す。新宮には、鳥居の法眼、鶴原の法眼。侍には、宇井、鈴木、水屋、亀甲。那智に、執行法眼以下、都合その勢二千余人なり。関つくり、矢あはせして、源氏のかたには、とこそ射られ、平家のかたには、かくこそ射られて、矢叫びの声退転もなく、鐙の鳴りやむひまもなく、三日がほどこそ戦うたれ。熊野の別当湛増、家の子郎等おほく討たれ、わが身手負ひ、からき命を生きつつ、本宮へこそ逃げのぼりけれ。

(屋代本は欠巻のため同系統の本文を有する百二十句本の第三句「高倉の宮謀叛」)

と描かれている。頼朝の旗揚げの根拠となった以仁王の令旨を湛増は知ったものの、それまで平家側に恩を感じていたので、源氏側の新宮の「行全」そして那智の「執行法眼」すなわち「範蒼」が率いる軍勢と対峙する。三日間の激戦の末に、湛増側は敗れた。この「行全」と「範蒼」の二人は、共に源為義の女を生母としており、「新宮家」と縁が深く新宮十郎と称された為義の子である源行家の勤めもあつて、「新宮家」の衆徒は源氏側について^{〔註68〕}。物語では施線にあるように「熊野の別当湛増」となっているが、湛増が二十一代熊野別当になるのは文治元年(一一八九)なのである。それを治承四年(一一八〇)としたのは、熊野を代表する統合的人格による所行として、一貫させる物語の趣向であつた。^{〔註69〕}要するに物語では「熊野の別当湛増」と虚構して源平の激突へ及ぼせる。この展開を諸本の異同で窺ってみると、この部分を慈円圈で創出した物語と慈円周辺圈で再編されることになる物語の相違の観点からみておこう。屋代本では、

熊野別当湛増、此日比平家二随タリケルカ、源氏既ニツヨルト聞テ、五十余艘ノ舟ニ乗テ、紀伊国田部浦ヨリ推出シ、西国ノ地ニ渡テ源氏ニ付ク。

と展開させているが、当該場面は延慶本には、

若王子ノ御前ニ參テ、孔子ヲ取テ、白鷄、赤鷄ヲ合セテ、「勝負ニ随テイツチヘモ付ベシ」ト思定テ、鳥合ヲシテミルニ、白鳥勝ニケリ。「サテハ源氏ノ打勝ニテ有ゴサムナレ」トテ、三百余艘ノ平船ヲ率テ、紀伊国田ノ部湊ヨリ漕来テ、源氏ニ加ル。

(六本・一一「源氏ニ勢付事付ヘ平家八島被追落事」)

とあつて、源平のいずれの側に入るべきかを決めかねた湛増は、「若王子」の前で「孔子」すなわち「籤」をひき、白鷄が勝つたのを見て、源氏勢に合流したと具体的に詳しく描いている。とすれば、慈円周辺圏で再編された祖本の延長線上にある延慶本は、白鷄と赤鷄とを競わせる挿話を加えたことになる。この相違からも慈円圏で創出した物語を遺存しているのは屋代本であると推定されてこよう。

源平の武力衝突に乗じて湛増の「田辺家」は、熊野三山の主導権を掌握するために時流に乗っていく。平家の勢力基盤の瀬戸内海周辺と伊勢との間にある熊野は、太平洋と瀬戸内海の航路が出会う海上交通の要地であるからには、その後、後白河院側による施政方針の人事の一環として元暦元年(一一八四)十月には念願の別当職を補任された湛増は、翌年二月の屋島合戦で平家軍が攻め落とされたのを知って、水軍を率いて源氏軍に合流したのであった。湛増は源氏側へ鞍替えして、「田辺家」は在地領主として大きな勢力を占めるようになっていったのである。

(九) 霊夢から宇都宮入道蓮生そして慈円圏へ

仁安・嘉応・承安期(一一六六―一一七四)の時期に度々歌合判者になっていた俊成は、安元二年(一一七五)九月に出家する。治承二年(一一七八)二月に家集『長秋詠藻』を詠作し、文治四年(一一八〇)四月には『千載和歌集』を編纂する。建久八年(一一九七)七月の初撰本『古来風躰抄』では、

身にとりて浅茅が末の露、本の雪とならむこと明日をまつべきにあらぬを、和歌の浦の波の音に思ひをかけ、住吉の松に色を染めて、塩谷の煙一方に靡き、入江の藻屑さまざまにかきつめんことの、(中略)この

道に心を入れん人は、万代の春、千歳の秋の後は、皆この倭歌の深き義によりて、法文の無尽なるを悟り、往生極楽の縁を結び、普賢の願海に入りて、この詠歌のことばを翻して、仏を讃め奉り、法を讃め奉り、法を聞きてあまねく十方の仏土に往詣し、まづは娑婆の衆生を引導せんとなり。

〔四〕

施線で歌神でもある住吉明神すなわち「冥」の側に言及して、仏説の奥義から、法文の無尽なるを悟り、往生極楽の縁を結ぶとの『華嚴経』の教えに則って、背馳する文学と仏の教えとは両立して統一すると揚言した。承久元年（一二一九）七月成立の定家の歌論『毎月抄』にも受け継がれて、

ただ仏の説き給へるあまたの御法も衆生機に与へ給へるとかや。それに少しもたがふべからず。

〔八〕

として、教化をうける者の根本的な資質に応じて説き方を仏は変えつつ教義を与えると表明して、さらには、

さる元久ころ住吉参籠の時、「汝月明らかなり」と冥の霊夢を感じ侍りしによりて、

〔九〕

と刻む。この霊夢は「冥顯二法」の道理の「冥」であって、後述するように『愚管抄』成立に直結する聖徳太子からくだった建保四年（一二二六）正月の霊告と相即する。定家は、院の熊野御幸に随行した一ヶ月経過した建仁元年（一二〇二）十二月六日、『明月記』に「日吉に参籠す。」とあって、比叡山東麓の山王権現を祀る日吉社に参籠した。その翌日の七日には「終日写経。夜に入りて宮廻る。」とし、五日後の十二日条には

未の時許に、第八巻を書き終へ奉り、所願を果し了んぬ。具に悦びとなす。

とあって、『法華経』（全八巻）を定家は写し終えている。ところで、その前日の十一日条には、

今夜の夢に、父母□□御座す。雑談の後、母儀立ち給ひて云ふ、（中略）……大鳥八中将なり。今入れ替へて、魔性の犬を追ひ出す。染糸ハはれ禁色の先表なり、早く亞相の望を遂ぐ。（中略）今生一生の宿運にあらざらや。

と記しており、施線にあるように中将になる夢をみていたわけだが翌年の建仁二年（一二〇二）閏十月二十四日には左近衛権中将に昇任した。そこで、『明月記』閏十月（反故の裏）に、

慶賀の事。

右久しく、鳳闕左使の旧勞を積みて、適々虎賁中部の朝恩に浴す。自愛極まり無く候ふの処、今、賀礼に預り、殊に感懷を抽んづ。

立ち昇るたつのころはをみひやかひあるみよのわかのうら浪

併しかしながらら、拝謁の次を期す。恐々謹言。後の十月廿一日、左中将定。

と、歌まで添えながら、昨年の夢が符合したと歎喜に咽んだ。写経の功德と実感し、冥衆のはからいと思つたことになろう。如法経供養を定家は厳修したのであり、『愚管抄』別帖の七十八代二条天皇の在位している治世にも「如法二立、又カヲツキテ拝ミケルコソ、ヨニタノモシカリケレ。」(巻五——三三六ページ)と叙述されている。

定家の靈夢からまる十五年後、夢とその符合の事実である九条家の慶事をめぐる聖徳太子の予言である靈告がくだった。そのことは西山隠棲している承元三年(一一〇九)三月二十三日に今は亡き九条良経の女の立子が入内して、その三ヶ月後に『慈鎮和尚夢想記』起草する。それには『愚管抄』の雛形となる道理の思念が投影している。立子入内の年より八年後の建保四年(一一二六)正月、四天王寺聖靈院參籠中に太子よりの九条家の僥倖をめぐる靈告が慈円にもたされる。建保六年(一一二八)十一月二十六日、立子から生誕した懷成親王が立坊。承久元年(一一二九)六月二十五日、良経の孫の三寅(頼経が四代鎌倉將軍繼嗣として下向。承久三年(一一三二)五月九日に当親王は即位、三寅の父の道家が摂政に就く。『愚管抄』皇帝年代記の八十五代仲恭天皇紀に「道理必然」(巻二——二四ページ)の言辭を嵌入した慈円は、それを末代の道理と揚言したわけである。聖徳太子の靈告も靈夢であった。『慈鎮和尚夢想記』起草した当時は西山の空間で本物語を慈円が企画する直前であり、しかも本物語の内実は「頼朝の物語」であつて、物語のなかには源頼朝の家の侍が頼朝に政權は移るといふ夢を見た場面が布置されている。すなわち、

「此日比平家ニアズラレタリツル節ヲハ、今ハ伊豆国流人前右兵衛佐頼朝ニタバラスル也」ト被レ仰ト夢と語られ、さらに、

二見テ、……

(屋代本・巻五「福原怪異事」)

寿永二年十月四日、安貞鎌倉へ下着、右兵衛佐宣ケルハ、「頼朝流人ノ身成シカ共、長^{シテ}二武勇之名誉^一、仍今ハ乍^レ居蒙^ル二征夷將軍之院宣^ヲ」^一。争力私ニテハ給ヘキ。鶴岳社ニテ給ヘシ」トテ、若宮ヘコソ被^レ参ケレ。

(屋代本・巻八「勅使安貞鎌倉下向事」)

となつてゐる。頼朝を好望の人としてとりあげられていく。ところが延慶本では、

「春日大明神ニテ御坐ス」ト申。(中略)世ノ末ニ源平共ニ子孫尽テ、藤原氏ノ大將軍ニ可^レ出ニヤ。

(二中・三四「雅頼卿ノ侍夢見ル事」)

として、道家の子息の三寅が四代鎌倉將軍に就くまでを予告している。法性寺に良経の嫡男の道家が慈円周辺圏を組織して『愚管抄』を取用しながら編纂した六巻本『治承物語』が延慶本の祖本の延長線上にあつたことに起因する(後述)。

屋代本に、これまでも言及してきているように慈円圏で創出した『治承物語』が遺存している。

物語が西山の慈円圏で創出されている最中の建保三年(一二二五)九月十三日に、定家は宇都宮入道蓮生と歌を詠み交わしていた。すなわち、

下野国にまかりける人に

たちそひてそれともみばや音にきく室の八島のふるき煙を

(三八三〇)

返し

蓮生法師

おもひやる室の八島をそれと見ば聞くに煙のたちまさらん

(三八三二)

定家は「心だけでもあなたに添つていつて、下野国にある室の八島の水煙を見届けたい」と詠じたので、蓮生は「あなたがそれほど思い遣つておられる室の八島を見たいならば、水煙がたちまさつてくることでしよう」と衷心より、和したのであつた。定家の子の為家が撰進した十番目の勅撰集の『続後撰和歌集』(巻第十九・羈旅歌)に採られた贈答歌であつた。定家と蓮生とは、その後、終生に亘り、きわめて親密関係を保つていく。この二首は、その親交関係を築いていく初期の重要な歌なのである。

蓮生の俗名は宇都宮頼綱(一二七二—一二五九)であり、宇都宮家第五代の当主で、鎌倉御家人として出仕していた。元久二年(一二〇五)八月七日、謀反の嫌疑の噂をたてられ、同月十六日に郎従六十餘人と出家して幕府執権の北条義時に弁明する。その後、蓮生は源空の門に入り、承元元年(一二〇七)に源空とともに遠流されそうになったが、慈円にあずけられて京にとどまり、建保元年(一二三三)に慈円の譲りをうけて西山の往生院の四世院主になっていく。證空を師と仰ぎ、多くの作善活動を行っていく。蓮生の子を定家は、嫡子為家の正妻にしたのであった。佐藤恒雄は「頼綱女は、元久元年から建永元年のころ出生、承久三年、十六歳から十八歳の頃に、当時二十四歳であつた為家に嫁し、翌年為氏を儲けた(中略)為家室は、京都に生れ育つた都人(中略)頼綱入道は、定家に命じられて信濃国の国務について、現地の地頭らの動静を提供(中略)かなり政治的な動きも多い。(中略)文雅風流に関する活動も旺盛である。」と論じている。^{〔註73〕}蓮生の子から生誕した為氏が、御子左家の和歌の宗匠家である二条家の祖となっていく。このことを顧慮したとき、蓮生の器量・人柄は定家の琴線のふれるところがあつた。さらに佐藤は「頼綱女は、長男為氏出産して二年後、元仁元年四月に二男源承を出産(中略)彼女の血の中には、父の頼綱の剛毅さと母系の情熱的実行力が、脈々と受け継がれていた」と論じている。^{〔註74〕}要するに蓮生には突出した世才や歌心の資質があつた。^{〔註75〕}

北条義時の父の時政と牧の方の間に生誕した女を蓮生は妻として、その間に生誕したのが泰綱である。泰綱は宇都宮家の六代目当主になる。杉橋隆夫は「定家の子為家の妻も牧の方の孫娘に当たるところから、母(宇都宮頼綱の妻、牧の方の娘)とともに招かれている。そもそも定家が為家の妻に頼綱の娘を迎えたのは、将来を期待するわが子の榮進を願つてのことだった。定家が官位昇進に懸ける執念は凄まじいものがあり、(中略)京都にしかるべき基盤を有する家柄の出身(中略)娘を源氏一族や京都の公卿たちに次々に嫁がせ、広く有力な人的ネットワークを形成」していたと指摘している。^{〔註76〕}殊に二重施線の言辭は非常に重要であらう。北条時政と牧の方について『愚管抄』別帖の順徳天皇の在世時を叙述している一節のなかに、

カクテ関東スグル程ニ、時正^政ワカキ妻ヲ設ケテ、ソレガ腹ニ子共設ケ、ムスメ多クモチタリケリ。コノ妻

ハ大舎人允宗親ト云ケル者ノムスメ也。セウト、テ大岡判官時親トテ五位尉ニナリテ有キ。其宗親、頼盛入道ガモトニ多年ツカイテ、駿河國ノ大岡ノ牧ト云所ヲシラセケリ。武者ニモアラズ、カ、ル者ノ中ニカ、ル果報ノ出クルフシギノ事也。

(巻六——三〇二〜三〇三ページ)

とある。この文章から、まず、時政と牧の方との間には多く女が生まれていたことが判然としよう。次に牧の方の兄の時綱は五位の下級貴族であった。波線では牧の方の父の宗親は永年に亘って頼朝の助命嘆願した池禅尼を母とする頼盛から、所領の管理をまかせられて時めいていた。施線部では「武者ノ世」ではありながら、武士ではない時綱は果報者と称揚し、「不思議」と慈円は寸言を添えた。とすれば、前掲の三八三〇番歌と三八三一番歌との定家と蓮生と贈答歌を配意したとき、牧の方の女を妻にした蓮生の識見は尋常ではなかったとの慈円の認識が、この文章の行間に介在しているように思われてこよう。鎌倉幕府の御家人の蓮生が慈円圈に参画し、慈円圈で創出している物語を取用しながら道理を『愚管抄』で説論していくからであろう。

和歌を愛した崇徳院は『詞花和歌集』を藤原顕頼に撰進させた。蓮生の母は、崇徳院に仕えた藏人長盛の娘なのである。そのため誕生から治承四年(一一八〇)、頼朝が挙兵するまでの蓮生は京の廟堂とその周辺で生育し、歌を母から習っていた。俊成は、はじめ顕頼の養子となつて顕広と称しており、崇徳院歌壇に参加し、治承二年(一一七八)には九条家の和歌指導者と迎えられる。俊成の養父顕頼の兄弟が長隆であり、長隆の曾孫が西山の空間で蓮生とともに「頼朝の物語」を内実とする本物語創出の主要メンバーの行長であった。^{〔註18〕} 谷山茂も、

勸修寺・葉室の一族(中略)『平家物語』の作者に擬せられる行長らを生んでいる一流である。多分に政治的官僚的な家柄ではあるが、また決して文学に縁のない血脈だったとはいえない。(中略)彼らの子孫たちの歌どもは、俊成の世界を構成するものとして、かなり多く千載集に取り入れているのである。^{〔註19〕}

と明確に指摘しており、『明月記』建仁二年(一一二二)八月八日条に、

八日。天晴る。陰雨、間々灑ぐ。盛時の子男、東国より上洛し來たる。此の男、和歌を好むに依りて、喚ぶ出す。道に於て、頗る其の意を得。京人に勝る。奇とすべし。

歌の道に秀でている東国出身の人物に好奇心を動かしている。嘉禄元年（一二三三）十二月七日条にも、

相州の子息次郎入道、去る二日死去と云々。師弟の約束をなす。和歌に於て尤も骨を得。痛み悲しむに足る。施線で歌の急所を非常によく心得ていると絶讃している。やはり東国の相模国出身者が死去したことを定家は痛嘆した。施線の言辞を帰納させると、この二人は「心得る鉢の歌」（『毎月抄』四）すなわち「有心体」を詠み得たからであろう。前章（七）で、物語の表現主体者の心情には「仏教的道義的因果律」・「余情妖艶美」にあわせて「平家の滅亡期のあわれさ」そして「意志の文学」があるとの谷山茂の分析を引用したわけだが、この『明月記』建仁二年八月八日・嘉禄元年十二月七日の各条からも透視されてくる定家の性癖とはきわめて近似するのは重要視せねばならない。

歌の天分が東国の幕府御家人の蓮生にやはりあると見抜いた定家は、蓮生の実母と父俊成さらに崇徳院歌壇以来の繋がりにも熱い思いを抱き、蓮生の女を嫡子の為家の正妻に迎えた主要な動機であった。

為家と蓮生の女のあいだに和歌宗匠家の二条家の祖となる為氏が誕生するのは貞応元年（一二三二）である。承久（一二二九）に改元前の建保末年（一二二八）より遡る承元四年（一二二〇）頃からの十年間に亘った西山の慈円圏で定家は蓮生の人となりをついに知る。慈円の方も、「武者ノ世」を精細に『愚管抄』で叙述している際に東国の生々しい情報を蓮生から提供されていた。^{〔註80〕}『愚管抄』を成立させるのは承久三年（一二三二）四月であった。ひとまず本物語が成立して、一息ついたときの承久元年（一二二九）頃に、定家が蓮生の女を嫡子の為家の正妻に迎えるのは時宜になつてゐる。

（十）編纂された「頼朝の物語」から慈円周辺圏へ

慈円圏で創出された物語の内実は「頼朝の物語」である。^{〔註81〕}このことは、これまでにも既述してきたが、本章では、西山の慈円圏で「頼朝の物語」として「編纂」されていく過程を具体的にたどりながら、法性寺に組織され

る慈円周辺圏で本物語が再編されていくまでのことをみていきたい。

『平家物語』巻第十の冒頭の文章では、一の谷の戦いで平家軍が敗亡した後の模様を、

寿永三年二月十二日、去七日一谷ニテ被_レ討平家ノ頸共、京へ入ル。其日、少シモ結ホ、レタル人々ノ、我
方様ニ今日、如何ナル事ヲカ見スラン、如何ナル事ヲカ聞ンス覧」トテ、歎ク人々多カリケリ。其中ニ、
大覺寺ニ隠居給ヘル小松三位中将ノ北方ハ、西国へ討手ノ向事ト聞度毎ニ、此度ノ軍ニ三位中将ノ、矢ニ
当テヤ死シラム、何ナル目ニカ合給スラント、シズ心ナク被_レ思ケルニ、……

(屋代本・巻一〇「二谷被討平家頸被渡大路事」)

と描いた。寿永三年(一一八〇)二月から、巻第十の巻末では「治承養和ヨリ以来、人民百姓等、(中略)春ハ東作
ノ思ヲ忘レ、秋ハ西収ノ営ニモ不_レ及。サレハ何トシテ加様ノ大礼ヲ可_レ被_レ行ナレトモ、サテシモ有ヘキ事ナラ
ネハ、如_レ形行ナハル。源氏驍テツ、ヒテ責シカハ、平家ハ其年皆滅ヘカリシヲ、」として、後鳥羽天皇即位に
もなう十一月大嘗会にふれながら、「本年モ既ニ暮_レ、元暦モ式稔ニ成ニケリ。平家巻第十」とした。巻第

十一の冒頭は「平家巻第十一 元暦二年正月十日、……」(屋代本・巻一一「九郎大夫判官義経院参事」)として始発させ、

源義経の後白河院への決意表明から、源平両軍の勇猛な激突を浮彫りながら壇ノ浦の海戦までを詳細に描きあげ
た。同年四月「廿八日、鎌倉前右兵衛佐頼朝、從二位二叙セラル。」(屋代本・巻一一「頼朝被叙從二位事」)の言辞を嵌
入し、平家一門の敗北後の悲惨な模様を押し出して、平重衡が「終頸ヲハ取テケリ。」と描き、「カヒシヤクノ女
房サヘ身ヲ投ケルコソ難_レ有ケレ。平家巻第十二」とした。巻第十二の冒頭では「元暦二年五月七日ノ卯刻

二、九郎大夫判官大臣殿ノ父子ヲ奉_レ具テ、関東ヘソ被_レ下ケル。」(屋代本・巻一二「宗盛清宗父子関東下向路事」)として
巻末では「其ヨリシテ平家ノ子孫ハ絶終ケリ。平家巻十二之終」と総括したのであった。巻第十の冒頭文に

は、前掲した文章の施線のように平維盛の妻が夫の安否を気遣っていることを象って、次の章段の一節では「三
位中将モ通フ心ナレハ、都ニサコソ我ヲ無_ニ覚束一思ラメ、」(屋代本・巻一〇「惟盛古郷音信事」)とし、その後には維盛
熊野参詣から維盛入水までの顛末が描かれていくことは、定家の『愚記』との対比から見たとおりである。「惟

盛古郷音信事」の後の六章段には、平家側の悲哀が濃厚であつた。そのなかには捕虜になつた重衡が東国下向していく経緯と頼朝との対面がある。そのことは「頼朝の物語」からは重要なので以下で具体的に窮つていきたい。

さて屋代本の巻第十には「惟盛高野登山并熊野参詣同入水事」の章段が布置され、その冒頭は、

小松三位中将惟盛ハ、我身ハ屋島ニ在ナカラ、心ハ都へ通ハレケリ。故郷ニ残置給フ北方少キ人々ノ事ヲノミ、明テモ暮テモ被レ思ケレハ、在ニ無^三甲斐^一我身哉ト、最物憂ソ覺テ、三月十五日ノ曉、忍ツ、屋島ノ館ヲ粉出、……

とある。本章段の末尾でも「……又船ニ取乗テ、海ニソ浮給ケル。比ハ三月廿八日ノ事也ケレハ、春已ニ暮ナントス。」との月日をやはり明記した。これは本章段の冒頭の施線の「三月十五日ノ曉」を承けている。その維盛入水を聞いて「涙ヲ流シアハレケリ。」と宗盛・時子とが落涙したことを添える。これに直結させて、

同四月一日、鎌倉前右兵衛佐頼朝、正二位下叙ス。本ハ從五位下也シカハ、五階ヲ越給コソ目出ケレ。

同三日、崇徳院ヲ可^レ奉^レ崇^レ神トテ昔保元ニ合戦ノ有シ大炊御門ノ末ニ、社ヲ造テ、宮遷有。賀茂祭以前ナレ共、法皇ノ御計ニテ、内ニハ不^レ被^レ知。

との事象を加えた。それまでの悲惨な平家側の動向を反転させて、寿永三年（一一八〇）四月一日に、二重施線では「正二位下」に頼朝が昇任したのを言祝いでいる。史実では正四位下であり、同じ系統の四部本も「正四位下に叙す。」とし、延慶本や他の諸本でも同じである。ところが、前掲したように海戦の顛末を詳細に描き、屋代本では「頼朝被叙從二位事」との章段を掲げて、同年四月「廿八日、鎌倉前右兵衛佐頼朝、從二位ニ叙セラル。」との関連からの編年体の趣向を踏襲しながら、諸本中で屋代本が最も高い昇叙を遂げたと描いている。これは看過されてはならない。二重施線部で頼朝昇進を言祝ぐための虚構である。しかも任じられた年月日と官位との関連から齟齬をもきたしているのは、原初の『平家物語』の面影を屋代本が遺存しているからであつた。本物語の当該場面は『愚管抄』別帖の八十四代順徳天皇の治世で、

平氏ノアト方ナキホロビヤウ、又コノ源氏頼朝將軍昔今有難キ器量ニテ、ヒシト天下ヲシツメタリツルア

トノ成行ヤウ、人ノシワザトハヲボヘズ。顯二ハ武士ガ世ニテ有ルベシト、宗廟ノ神モ定メヲボシメシタルコトハ、今ハ道理ニカナイテ必然ナリ。

(巻六——三〇四ページ)

と叙述されている。施線で頼朝が動揺していた王法を安寧に導いたといひ、二重施線では冥衆の計らいであると説くのと呼応している。右文は源実朝の暗殺へ及ばせる直前にある一節であり、物語の展開とは無関係の崇徳院の廟を後白河院のはからいで造営したを事象を前掲したように「四月一日」として頼朝が「五階ヲ越給コソ目出ケレ。同三日、崇徳院ヲ……」と唐突に描いているのと軌を一にしている。これには物語の「編纂」の意識が看取されると同時に『愚管抄』の叙述の仕方とも類同するであろう。

本物語では、捕虜になった平重衡のめぐる一連の哀話は精彩を放つ。頼朝が重衡に会見した場面が、

兵衛佐、三位中将二対面シ給テ、「会稽ノ恥ヲ雪メ、君ノ御憤ヲ休奉ラント存候シカハ、平家ヲ滅奉ン事ハ案内ニ候キ。サレトモマノアタリニ、力様ニ可_レ入_三見参_一トハ不_三思寄_一。カ_レハ定テ、屋島大臣殿ノ見参ニモ、今ハ入ツトコソ覚候ヘ。抑奈良ヲ滅給ヘル事ハ、故大政入道ノ御計ヒ候力、又時ニ臨ミタリケル事候力。無_レ量罪業ニテコソ候ラメ」ト宣ヘハ、

(屋代本・巻一〇「同重衡頼朝対面以後狩野介預事」)

と描かれている。頼朝の言動がきわめて精彩を放っている。施線部は『愚管抄』別帖の八十一代安徳天皇の在位している治世にある、

猶十二月廿八日ニ遂ニ南都ヘヨセテ焼ハラヒテキ。ソノ大將軍ハ三位中将重衡ナリ。アサマシトモ事モオロカナリ。(中略)サテカウ程ニ世ノ中ノ又ナリユク事ハ、三條宮寺_(以仁王)ニ七八日ヲハシマシケル間、諸國七道ヘ宮ノ宣トテ武士ヲ催サル、文ドモヲ、書チラカサレタリケルヲ、モテツギタリケルニ、伊豆國ニ義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、……

(巻六——二五〇〜五一ページ)

と叙述されている一節と対応する。平重衡による南都焼亡すなわち仏法の危殆と清盛等の領導する廟堂の腐敗すなわち王法の危機と二重施線にあるように源頼朝とを結合させた。そこには仏法王法相依の道理を則って創出させた『治承物語』が慈円の念頭に置いている。この『愚管抄』の右文の一節は、歌人慈円の本説取りの修辞なの

である。慈円自身が企画して創出させた「頼朝の物語」を内実とする本物語の眼目である頼朝の旗揚げの事象が右文の行間ににじみ出ており、混乱している治世を安寧にしていく頼朝が取り出された。道理から、はじめて頼朝を正面に押し出していく結節となっている。その意味でも本物語と『愚管抄』とは同質の方法がとられていることになる。

頼朝が護送されてきた重衡と会見する場面は『吾妻鏡』寿永三年三月（一一八四、元暦元年四月十六日に改元）二十八日条に、

廿八日、丁巳 本三位中将 藍擦の直垂、立烏帽子を引く。 を請ぜられ、廊において謁せしめたまふ。仰せて云はく、かつは君の御憤りを慰めたてまつらんがため、かつは父の死骸の恥を雪が^{すす}んがため、試みに石橋合戦を企てしより以降、平氏の逆乱を對治せしむること、掌を指すがごとし。よつて、面^{おもて}に及ぶ。不屑の眉目なり。この上は槐門^{（常憲）}に謁するの事も、また疑ふところなからかてへれば、……

旗揚げしてよりの我が戦歴を頼朝は回顧し、後白河院の憤激を慰めると同時に父の源義朝の恥をすすぐことにあつたといい、二重施線にあるように重衡と会えたことは名誉と述懐して、以下では敵のために捕虜となることは、決して恥でないと語ったので側で聞いていた者は感動したとある。幕府が編纂した歴史書の『吾妻鏡』と本物語との接点が看取されよう。王法の中枢にいる後白河院の第三皇子である以仁王の令旨を根拠に立ち上がり、その後、平家政権下で改元された「養和」・「寿永」へと改元されたにもかかわらず、東国では平家と争い勝利の見通しがつくまで頼朝は私年号として「治承」を使用し続ける。それが西山の慈円^{（註物）}で創出した本物語が、『治承物語』と命名された理由であり、本物語の内実が「頼朝の物語」であつたからである。

『愚管抄』別帖の八十二代後鳥羽天皇即位当時を叙述し、

同寿永三年二月六日ヤガテ此頼朝ガ郎從等ヲシカケテ行ムカイテケリ。ソレモノノ谷ト云フ方ニ、カラメ手ニテ、九郎ハ義経トゾ云シ、（中略）サテ船ニマドイ乗テ宗盛又落ニケリ。

とし、これに直結させた慈円は、

其後ヤガテ寿永三年四月十六日二、崇徳院并二字治贈太政大臣寶殿ツクリテ社壇春日河原保元戦場ニシメラレテ、

(巻五——二六三ページ)

と推移させている。一門都落ちの叙述は、前掲したように維盛入水聞いた宗盛・時子は「涙ヲ流シアハレケリ。」に対応し、後者は保元の乱で敗北して廟堂にいた君主の追善であった。したがって、物語にあった「鎌倉前右兵衛佐頼朝、正二位下叙ス。……五階ヲ越給コソ目出ケレ。」に直結させて、

同三日、崇徳院ヲ可^レ奉^レ崇^レ神トテ昔保元ニ合戦ノ有シ大炊御門ノ末ニ、(中略)宮遷有。賀茂祭以前ナレ共、法皇ノ御計ニテ、内ニハ不^レ被^レ知。

と続けたのと、『愚管抄』とは同じ編年体の構成をとっている。しかも物語では、直後には「其頃池大納言頼盛、関東ヘコソ被^レ下ケレ。」と始まる「池大納言頼盛関東下向頼朝対面事」の章段が置かれ、頼朝の言行が描かれていく。このことから慈円圏で創出された本物語の内実が「頼朝の物語」であったといえよう。

前章(七)で既述したように、物語に那智籠りの僧が華麗な装束に身を包んで維盛が舞った姿を回顧している場面が描かれていた。『建礼門院右京大夫集』にも二首の歌を添えて、

梅の花の色によそへしおもかげのむなしき波のしたにくちぬる

(二一五)

かなしくもかかるうきめをみ熊野の浦わの波に身をしずめける

(二一六)

とあって、二一五番歌では維盛を桜花になぞらえて無常の波の下に朽ちてしまったと詠じ、二一六番歌でも熊野の浦に身を沈めた維盛を悼んで詠じている。本物語と同じ構造なのである。そのことから、本物語の初期生成である慈円圏そして慈円周辺圏へ参画するあたりまでの頃の定家をみていこう。それに先だって、まず慈円圏そのものの文事と慈円周辺圏そのものの文事とを対比しておきたい。

承安三年(一一七三)に出仕した作者の右京大夫は、平家全盛の治世で五年間、建礼門院徳子の女房として仕え、やがて平資盛の恋人となる。平家都落ち直後ではの悲嘆と追憶の日々を暮らす。建保六年(一一九五)、七年頃に再び出仕。『明月記』建永元年(一二〇六)七月十二日条には、

今夜詠進す。歌合せ有るべし。大納言兼宗卿・大理季経卿(入道)・隆保朝臣・通方朝臣・七条院右京大夫・賀茂重政・蓮重(内々仰せて云ふ、他家の歌人其の歌体を咲はんため、故に之を召さる。詠進する所、宜しき歌有り云々)。

とあつて、施線にあるように嘲弄される歌人の一人に定家は加えていた。ところが寛喜二年(一二三〇)七月五日に『新勅撰和歌集』の「編纂」を命じられた定家は、『建礼門院右京大夫集』を原資料に用いたのであつた。^{〔註83〕}九番目の本勅撰集の「編纂」にあたつては、現今の治世を領導している執政の「臣」としての九条道家の意向がはたらいっている。しかも道家は『愚管抄』を熟読していた。^{〔註84〕}道家は慈円の揚言する「冥頭二法」の道理から政治に邁進したわけである。周知のように『建礼門院右京大夫集』(下巻)の冒頭で、

寿永元暦などのころの世のさわぎは、夢ともまぼろしとも、あはれともなにと、すべてすべていふべききはもなかりしかば、よろづいかなりしとだに思ひわかれず、なかなか思ひも出でじとのみぞ、今までもおぼゆる。

平家全盛期の「花のさかりに月明かりし夜を、「ただにあかさむ」とて、権亮朗詠し、笛吹き、」と「権亮」すなわち維盛を象り、

権亮は、「歌もえまぬ者はいかに」といはれしを、なほせめられて、
心とむな思ひいぞそといははむだにこよひをいかがやすく忘れむ (九七)

とあつて、維盛は「自分のように歌など詠むことできない者はどうしよう」といったが、それでも催促されたので、「今夜のことは決して忘れません」と詠じた歌を、右京大夫は私家集と日記文芸的品格とを併せもっている本集に収載した。平家一門の華やいでいた往時を偲びながら、定家は一門衰亡へと物語化をすすめていったであろう。

俊成が『千載和歌集』を奏覧し、定家が九条家周辺の作歌活動に関わり始めている二十代末から三十代前半は、慈円の三十歳半ばから四十歳にあたる。『玉葉』文治六年(一一九〇)三月十二日条に「今日、法印又来たり。終日談話す。明日西山に帰入すべし。又晦比出京すべしと云々」等と記載しているので、西山にいる右京大夫の周辺のことをも伝え聞いていたかも知れない。それは、前章(七)で既述したように文治五年(一一八九)頃より西山

の善峯寺に右京大夫は長らく在住していたからであった。丁度その頃は、九条家の家司の定家が『松浦宮物語』を創作中であつたので、異国の武力衝突をめぐる浪漫的な物語にも好奇の目を向けた慈円は、源平の争乱の余塵が醒めきらない時局ともあわさつて、定家創出中の物語をも話題にしながら定家と速詠を楽しんでいる。^{〔註85〕}ここには、慈円・定家・右京大夫等の「あそび心」が彷彿としていよう。後年に西山に組織した慈円圏の「あそび心」にもとづく「いくさ物語」創出の前兆のような雰囲気醸成されていた。

慈円の甥である良経の子が執政の「臣」に就く。九条道家である。再言するが、貞永元年（一二三二）に即位した四条天皇の外祖父にして、しかも四代鎌倉將軍の頼経の実父の立場にあつた道家の意向に従つて、寛喜二年（一二三〇）七月五日から勅撰集の「編纂」を開始した定家は、文暦二年（一二三三）三月十二日に浄書完成させた。その前年の『百鍊抄』十一月九日条に、

九日甲辰、中納言入道^一 定家卿。於^二前関白家^一被^二覧新勅撰^一。〔御時披^二奏覧^一〕。両殿下督臨有^二用捨事^一。被^レ切^二弃百首^一云々。又有^二被^レ入之人^一云々

とある。既述したように『建礼門院右京大夫集』をも原資料にしつつ、歌の削除や切り入れに懸命になっていた。『新勅撰和歌集』の「編纂」に進出した四年後の嘉禎三年（一二三三）頃から仁治元年（一二四〇）にかけて、道家は法性寺に慈円周辺圏を組織する。そして延慶本の祖本の延長線上にある六卷本再編を主導したのであつた。^{〔註86〕}勅撰集の「編纂」をする定家と本物語再編の文事とは踵を接していた定家は慈円周辺圏に参画していくことになる。

（十一）藤の花と藤原定家——結びにかえて——

承久元年（一二二九）六月二十五日に藤原摂関家の九条道家の三寅こと頼経が四代鎌倉將軍繼嗣として下向する。その事象を批評するために『愚管抄』付録前半の「史」の論では、人皇の初代神武天皇から八十四代順徳天皇の在位する現今の治世をまでを七期に分け、そのすぐ後に次のような言辞を添えた。すなわち、

カ、ル道理ヲツクリカヘクシテ世ノ中ハスグルナリ。劫初劫末ノ道理ニ、佛法王法、上古中古、王臣萬民ノ器量ヲカクヒシトツクリアラハスル也。サレバトカク思トモカナフマジケレバ、カナハデカクヲチクダル也。カクハアレド内外典ニ滅罪生善トイフ道理、遮惡持善トイフ道理、諸惡莫作、諸善奉行トイフ佛説ノキラくトシテ、諸佛菩薩ノ利生方便トイフモノ、一定マタアルナリ。

(巻七——三二六、二七ページ)

とあつて、二重施線で時宜相応に変転してつくりえられていく道理を揚言して、具体的な道理の諸相に及ばせ、施線にあるように「冥顯二法」の道理に則つて、冥衆のはからいとした、そして、

イマ左大臣ノ子ヲ武士ノ大將軍ニ、一定八幡大菩薩ノナサセ給ヒヌ。人ノスル事ニアラズ、一定神々ノシイダサセ給ヒヌルヨトミユル、

(巻七——三三六ページ)

頼經の將軍繼嗣の事象を末代の道理であると説諭する。別帖では、治承四年(一一八〇)八月の頼朝の旗揚げより、承久元年(一一二九)六月の当該の將軍繼嗣までの廟堂と幕府との動向を叙述していた。本事象そのものを叙述していくにあたり「頼朝ユ、シカリケル將軍」(『愚管抄』巻六——三二二ページ)と評し、同年「六月廿五日ニ、武士ドモムカヘニノボリテ、クダシツカハサレニケリ。京ヲ出ル時ヨリ下リツクマデ、イササカモく、声ナクテヤマレニケリトテ、不可思議ノ事カナト云ケリ。」としている。波線部で頼經がわずか二歳の幼童でありながら泣くこと無く下向していったと叙述するのは文飾であらう。二重施線のように「不可思議」と摘記するからには「冥顯二法」の「冥」の道理から把握したからであつた。

承久元年の將軍繼嗣の事象の時運に及ぶ半世紀前の時空間、嘉応二年(一一六九)の「殿下乗合」の平清盛の「武」による反撃から治承四年(一一八〇)以降の頼朝の率いる軍による平家軍との衝突を描いて、仏法と王法との安寧へ及ぼせるのが「頼朝の物語」を内実とする原『平家物語』の『治承物語』である。それを『愚管抄』に取用したのであつた。^{〔註87〕}『治承物語』創出に参画した定家の詠歌姿勢そのものにスポットをあてて、六巻本『治承物語』の再編にも定家は如何に尽瘁していったかを窺っていききたい。

『愚管抄』別帖の八十三代土御門天皇の在位している治世で、慈円自身を、

後京極殿ハ、院モイミジキ関白摂政カナト、ヨニ御心ニカナイテ、ヨキ事シタリト、ヒントヲボシメシテアリケリ。山ノ座主慈円僧正ト云人アリケルハ、九條殿ノヲト、也。ウケラレヌ事ナレド、マメヤカノ歌ヨミニテアリケレバ、摂政トヲナジ身ナルヤウナル人ニテ、「必参リアヘ」ト御氣色モアリケレバツネ二候ケリ。

(巻六——二八七ページ)

としており、第三者的に叙述し、波線部では行間に含差をにじませながら、施線で本格的な歌人としたのである。將軍繼嗣として東国に下向した頼経の祖父の「後京極殿」すなわち良経は詩歌に馴染み、俊成を師として歌壇活動が活発であったことは周知のとおりであって、良経家歌壇は『新古今集』へ結実していく新風歌風を育成した土壤として大きな役割を果たす。『明月記』元久二年（二〇五）四月二十九日条に、

廿九日。天晴る。殿下に参ず。大僧正参じ給ふ。頭弁、同じく御前に候す。終日雑談す。(中略)此の次で、又詩歌を合せらるべき由、議定せらる。出題し、歌人を催すべきの由、仰せを蒙りて退出す。此の事頗る無益の事なり。

と記している。施線にあるように、当時、執政の「臣」である良経は、自邸で詩歌合を企画し、出題と出詠者を定家に委託したものの、二重施線にあるように「九条家の伝統を継承しつつ、新たな文芸形式を作ろうという積極性(中略)詩と歌とを合わせるという困難さ」を定家は痛感した。^{〔註88〕}内心ではそうであったが、定家は「水郷春望」と「山路秋行」の二題を提案するとともに歌人には慈円・家隆等と自己自身を含めて十八名、詩では良経・長兼・為長そ行長等十九名を選んだ。^{〔註89〕}翌年の建永元年（二〇六）三月七日、「臣」在任中に良経は頓死した。翌年の承元元年（二〇七）の一周忌で慈円と十首の贈答をした定家は、

又の年三月七日、賀茂に御幸侍し次の日、大僧正十首御歌の返し

うきながら昨日はそれもしのばれきまたしらざりしこそあのあけぼの

けさはいと涙ぞ袖にふりまさるきのふもすぎぬこども昔と

(中略)

(二六六四)

(二六六五)

いはへどもわがため露ぞこぼれそふ藤のさかりを松はふりつゝ

(二六七三)

と詠じた。二六六四番歌・二六六五番歌では良経の菩提を弔い、十首目の二六七三番歌の下句「藤のさかり」には良経の子孫の繁栄を託している（当該歌は慈円圈・慈円周辺圏で大きな意味をもつ。後述）。藤原摂関家の九条家に仕えている定家の哀情を披歴する。その一ヶ月前に括目すべき定家の行動があつた。それは『明月記』同年の承元元年二月三日条に、

七条壬生に於て騎馬す。山を超え河を涉りて、吉峰に参ず（僧正御房）。

とあつて、西山の本寺の善峯寺に定家は出向いている。この事実があつた後の十二年後の建保三年（二二一九）九月から十月にかけて順徳天皇の在位する内裏で定家が詠進した『内裏百首』に、

小塩山

あさしももしらゆふかけて大原や小塩に山に神まつころ

(二二五二)

善峯寺の北尾根にある往生院の麓に聳立している大原野社の祭礼のある時分には、朝霜も白木綿を置くであろうと詠じてもいる。一二五二番歌は『古今集』（巻一七・雑上）の在原業平の、

大原や小塩の山も今日こそは神世のことと思ひいづらめ

(八七二)

を参考歌にした。業平は大野原で呱呱の声あげ、幼少期はそこですごしており、慈円圈のあつた往生院から阿智坂を下つて進むと業平の遺蹟である塩竈が今に伝えられている。さらに翌年の承久二年（二二二〇）八月に、

小塩山千世のみどりの名をだにもそれとはいはぬ暮ぞひさしき

(二四六五)

松の「待つ」と夕暮れ時の恋心とを巧みに合わせた「題をまわした歌」であり、慈円圈の「あそび心」に確かに通じている。前掲した『明月記』承元元年二月三日条の「吉峰に参ず（僧正御房）」は、慈円圈に参画していく定家を見ていくうえできわめて重要である。

前掲した慈円の甥の良経一周忌での二六七三番歌の「藤のさかり」は、慈円の出自の藤原摂関家と定家との交わりから極めて重要である。小著『愚管抄の言語空間』（汲古書院・二〇一四年）で論じたように、当該歌を詠じた二

年後の承元三年（二二〇九）三月二十三日に良経の女である立子の入内の慶事があり、その三ヶ月後、『慈鎮和尚夢想記』を西山で起草し、『愚管抄』で藤原撰閥家の立子から生誕した仲恭天皇の即位を道理と展開させるからである。一方、四年前の元久二年（二二〇五）三月十日に『新古今集』を後鳥羽院へ奏覧されたが、同二十六日には「編纂」終了の竟宴には定家は欠席した事実がある。そのことをめぐって、辻彦三郎の言説を次に掲出したい。すなわち、

元久二年（二二〇五）三月、新古今和歌集竟宴が行われた。しかしその後数年の間、定家の作歌数が下降線を辿るのは彼がスランプにおちいったことを物語るといふべきであろう。（中略）その後の十年ほどというものを定家は諸方の歌合の判詞を草するか自作の整理をするかなど、もっぱら内面的な活動に費やしていた（中略）それから以降も歌人としてと同時に、著述家として、学者として不滅の業績を遺すという余生を過ごしたのである。^{〔註四〕}

施線にある十年間とは元久二年から建保三年（二二二五）であり、二重施線にあるように定家の内省期であった。その時期は、慈円も甥の良経が頓死し、翌年には兄の兼実が寂したので、廟堂や四天王寺別当を辞任したりして公の場から身をひく。そして西山へ隠棲した慈円に定家は歩み寄って、物語創出に参画していくのであった。

ひとときわ秀麗な情趣と哀愁が充溢している物語の章段の「月見」を見ると、まず「古き都ノ月ヲ恋ヒテ、」として描き、近衛河原にある妹の皇太后多子の邸を訪ねた徳大寺実定は、妹に仕えている「待宵の小侍従」を呼び出して、

……旧都ノ荒行ヲ、今様ニコソウタハレケレ。

旧キ都ヲ来テミレハ浅芽力原トソ荒ニケル

月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム

ト、推返く二三反ウタヒスマサレタリケレハ、大宮ヲ始メ進テ、御所中ノ女房達、皆袖ヲソヌラサレケル。

（屋代本・巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」）

今様をうたつたと展開させている。この実定の形象は、平家一門を族滅させていく頼朝を主軸にして剛健な源氏勢の群像を讃える「いくさ物語」へのアンビバレンスすなわち「両価性、一つ事柄に相反する二つの感情・態度」で展開させる物語としての趣向である。別所の西山の宗教活動を維持する施与の「壇越」である徳大寺家へのただならぬ報謝の思いが慈円圈に充溢して、本物語の内実である「頼朝の物語」の核心の一角として実定は讃美されていくからであつた。^{〔註9〕}頼朝の急死をめぐる情報については『明月記』正治元年（二一九）一月十八日・二十日・二十二日にみえており、翌二月十八日条には、

今日、院御読経結願。偏へに、是れ前右大将の追善と云々。聖覚、弁舌と云々。

とあつて、一月十三日に寂した頼朝の法要に、定家と親交している聖覚も参加していたことを記していた。このことから、深い情念をこめる歌の「景気」の修辭を用いて「月見」の章段が描かれた。すなわち慈円圈に参画している定家が一枚かんで潤色されたとしても不自然はない。九条良経の一周忌で詠じた二六七三番歌の「藤のさかり」そのものをみていこう。

四条天皇（二三一～二四一）の外祖父にして、その時の執政の「臣」である道家の意向を組み入れ、定家は『新勅撰和歌集』の「編纂」をする。程なく、法性寺の空間に慈円周辺圈を主導した九条道家は、『治承物語』を六巻本へ再編させた。その六巻本『治承物語』を祖本の延長線上にある延慶本には、

庭ノ若草滋リツ、岸ノ青柳色深く、松ニ懸レル藤並、木末ニ一房残レル花、君ノ御幸ヲ待進ラセケルカト覚テ哀也。

（六末・二五「法皇小原へ御幸成事」）

と描かれており、すでに『和漢朗詠集』にも、

たこの浦に底さへにほふそ藤なみをかざして行かむ見ぬ人のため

（一三五）

とある。物語の二重施線の「藤並」すなわち「藤の花房」については、『明月記』治承四年（一一八〇）三月三十日条に、

卅日。天晴る。法性寺に向ふ。右衛門渡らる。藤の花を見る。

施線では法性寺境内の定家の同母姉を妻としている正三位参議の藤原家通の邸宅を尋ねた際に見ていた。先月の

二月十一日にも「六角に向ひ、武衛に謁し申す。」とあり、武衛（家通）とやはり出会っており、そして当日、

布衣騎馬の時、薄色の指貫を着せば、隨身を具すべし。浅黄を着せば、隨身無かるべき由、先達の説有る由、語り給ふ。

とある。知られるように、布衣で騎馬の時、薄色の指貫を着るならば、隨身を伴うべきであり、浅黄（色の指貫）を着る時は、隨身を伴うべきではないという、先人の説があるとの故実を甥の十九歳の定家に諭し、いずれは必要になる知識を教えた。^{〔註92〕}特に留意せねばならないのは、治承四年三月三十日条で法性寺に赴き、圈点にあるように「藤の花」を定家は見ていたことである。当寺は慈円周辺圏が組織される空間であるからである。

法性寺境内の家通邸で「藤の花」を定家が見ていた前年の治承三年二月九日には、父の俊成から『古今集』の伝授をうけ、翌月の三月十一日、内の殿上人となつたものの平家一門の極盛期であつた。定家は、

秋津しまをさむるかどののどけきにつたふる北の藤浪のかげ

（七二三）

我が秋津島を治める藤原北家の兼実一族の門は平穩で「藤の花房」の花影をつたえているが、今では見通しもつかない^①と現今の治世に不平をもらしている。後述もするように『古事記』編纂当時の治世に時めいていた藤原不比等の次男の房前が藤原北家の祖であり、その直系が藤原摂関家の九条家なのである。その家に仕えている立場を鮮明にした七二三番歌の「秋津島」は『古事記』（下巻）の歌謡の「そらみつ倭の国を蜻蛉島」（日本国の古称）をもとに詠じている。また宇都宮歌壇を代表する家集の『新和歌集』にも、定家の

宇都宮神宮寺障子歌に

多武の山頼む尾上の身かくけ春日もさゝぬ藤のしおれ葉

（三八六九）

との歌が入集しており、上の句で冥衆に加護を祈請して、下の句では御堂関白道長の六男長家を祖とする和歌の家柄である御子左家の出自であつて、春の日の藤の萎れ葉に似ているとの所懐の一端を詠じた。嫡流の九条家に仕えている立場をこめている。『新古今集』に採られた慈円の、

おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲ぬれば紫の雲

（二九四五）

『法華經』(卷第八・觀世音菩薩普門品第二十五)すなわち『觀音經』の教えから、この世はすべて一切が空であると思つていたが、藤の花が咲けば極楽の紫雲が懸つたようだとこの歌があるうえ、

おはれと思出らむ住吉の松頼みこし藤の末葉を

(四四〇二)

と詠じた歌がある。前章(一)で既述したように住吉明神に加護を祈請していたわけだが、下の句では、兼実の弟でありながら、自己は「末葉」なのだと卑下する思いが介在している。したがって、下の句は定家の三八六九番歌の下の句「藤のしおれ葉」と同一の感慨にふけていたのであり、歌を介して二人は共鳴し合つてもいたであろう。

建保六年(一二二八)十一月二十六日に良経の女の立子から生誕した懷成親王が皇太子になった。そこで立子の弟の道家が皇太子傳となる。これを『愚管抄』別帖では「十一月廿六日ニテヤガテ立坊有ケリ。清和ノ御時ヨリ一歳ノ立坊サダメレル事也。カ、ルメデタキ事世ノ末ニ有ガタキ事カナ。」(卷六——三〇六ページ)とし、翌年の承久元年(一二二九)六月二十五日道家の三男の頼経(三實)が將軍繼嗣として下向したことを批評するために付録を書き継いで、「今ハ正道ヲ存ベキ世ニナリタル也。」との言辞に直結させて、前掲したように、

コノ東宮、コノ將軍ト云ハワツカニ二歳ノ少人ナリ。コレヲツクリイデ給フ事ハヒトヘニ宗廟ノ神ノ御サ
タアラハナル。

(卷七——三四二ページ)

として、末代の道理と慈円は揚言したのであった。慈円の、

春日山深き誓ひを聞くからに頼みも藤も松にかゝりぬ

(四九九二)

との歌と確かに呼応している。四九九二番歌の詠作年次不明であるが、『愚管抄』を成立させた頃であろう。それは、『愚管抄』別帖の推古天皇の在位の治世で、

サテコノ、チ、臣家ノイデキテ世ヲオサムベキ時代ニゾ、ヨクナリイル時マデマタ天照大神アマノコヤネ
ノ春日大明神ニ同侍ニ殿内ニ能為ニ防護ニト御一諾ヲハリニシカバ、

(卷三——一四〇二ページ)

宗廟神の天照大神と社稷神の春日大明神との約諾によつて治世は保たれる道理とも相即しているからである。承

久元年（二二九）から翌年頃に詠じた『賀茂百首』のなかに、

多祐の浦に藤咲ぬらし磯根松梢そめゆく紫の

(二二二三)

との歌があり、そのうえ本百首には他にも「双葉より心にかくる葵草を重ねてすゝぐ和歌の浦浪」（二三七〇）として、上の句の「双葉」には懐成親王と頼経を「見立て」の修辞を施して詠じており、『愚管抄』皇帝年代記に懐成親王が即位して八十五代仲恭天皇となり、道家が摂政になった承久三年（二三二二）四月の時局は九条家が王法の頂点に達した治世とも結合している。同年同月を以て『愚管抄』の皇帝年代記に仲恭天皇紀を布置して「道理必然」（巻二——二三四ページ）として、『愚管抄』を成立させた。その翌月に承久の乱が勃発して、九条家から近衛家へ政権は交替してしまった。だが、

神よいかによもと思ふも猶悲し憂からむために生き残身か

(四七一三)

冥衆には裏切られることはあるまいと詠じる。末代の道理を確信しつつ、慈円は七十一歳の人生を閉じた。そのことは近江国坂本の小島坊で慈円が寂する百五十日余前の『明月記』嘉禄元年（二三二五）五月八日条に、

八日。朝天猶陰る。已後に又雨降る。坂本御消息の次でに聞く、定修最勝に漏ると云々。当時の政、一身に於て露見する事か。尤も道理と謂ふべし。

とあって、施線から判然とするように慈円は定家に消息をもたらし、その消息のなかに二重施線にあるように現今の推移している治世を「道理」なのであると慈円が記していたと定家は、明確に刻んだ。定家も末代の道理を思い遣っていたのであった。慈円と定家とは形影相伴っていたのである。

九条道家が法性寺の空間に慈円周辺園を組織して『愚管抄』を撰取しながら、本物語を六巻本に再編する。そのことを、本章の当初でふれたように定家の詠歌姿勢に着目して具体的にみていこう。

『明月記』治承四年（一一八〇）五月二十一日条に、

廿一日。天晴る。法性寺に向ふ。

とあり、また翌月の六月一日条には、

一日。天晴る。遷都一定の由と云々。伝へ聞く、遷都必然と。

さらには、同年九月十五日条で、

十五日。甲子。夜に入り、明月蒼然。故郷寂として車馬の声を聞かず。歩み縦容として六条院の辺りに遊ぶ。とみえる。十九歳の定家は、法性寺に一時住んでおり、遷都の情報も弁え、当時は荒廃が進んでいた白河院の六条内裏の辺りを徘徊するばかりであった。^{〔註93〕}定家が仕えている九条兼実は移住しないが、正治元年（一九九）五月十三日条に、

法性寺おはします（大臣殿、御同車）。予州と同乗し、御共に参ず。造作所を御覧す（未の時許りに還りおはします）。とみえているから、法性寺境内に新たに邸が造営される。その四ヶ月後の九月十二日条には「夕、奈良僧都、人夫五人を送らる。法性寺殿御造作のため」とし、さらに同月十八日条には、

御共して（駕駟に馳す）法性寺に参ず（御輿）。滝水^{たしかん}轉^ま濔^せ等を御覧す。形勝の地なり。滝の高さ一丈五尺と云々。明日宮女房、歴覧すべしと云々。

とみえるので、華麗な庭園も整備された。

建仁三年（二〇三）八月一日の良経詩歌合で定家は、

摂政殿にて歌を詩にあはせらるべしとて、おなじ題を二首よませられし、詩歌合とかやの初也。

此後連々有^二此事^一

春の花の雲のほひに初瀬山かはらぬ色ぞそらにうつろふ

(二〇五三)

たますだれおなじみどりもたをやめのそむる衣にかをる春風

(二〇五四)

二〇五三番歌では花が雲を色づかせ、初瀬山が空に映えているとし、二〇五四番歌は緑の玉簾はやさしい女の美しく染めた衣のように緑色の山を彩って花が咲き、春風が薫っているとしており、艶麗であると詠じた。この二首は、『伊勢物語』の在原業平の兄「行平」が饗応の宴で、

……あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。

(中略)

桜花下にかくる人多みありしにまさる藤のかげかも

「などかくしもよむ」といひければ、「おほき大臣の栄花のさかりにみまそがりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひける。みな人、そしらずなりにけり。

(第一〇一段)

とあるのを本説にしている。桜花の下で恩顧をうけている人も多いのですが、それ以上に、これまでにまして栄えているのは「藤の花」ではないでしょうかと問いかける。そこで、人々が「なぜそのような歌を詠むのか」と尋ねると、男の「行平」は、「太政大臣が栄花の絶頂にいらつしやつて、藤原氏が特別に栄えていることを念頭に置いて詠んだのです」と答えたので、一座の人はみな、口をつぐんだ、と。この二〇五三番歌・二〇五四番歌の詞書にある「摂政殿にて歌を詩にあはせらるべし」から、良経と法性寺の空間とについて、谷知子は、

父兼実とともに頻繁に法性寺を訪れていること、法性寺に行くという行為が彼らにとつて数奇と結びついていたこと、(中略) 隠遁志向の歌には、法性寺を舞台にして、或いは法性寺をイメージして詠まれていたものがあるのではないか、という見通しをしめしておきたい。^{〔註94〕}

と論じている。理由として、『明月記』の前年の建仁二年(二二〇二)一月二十八日条には、

夜前九条殿御出家、幽かに聞き及ぶかといへり。入道殿還りおはしますの後、申始許りに、法性寺の月輪殿に参入す(新御堂)。

とあって、法性寺に定家は出向いた。同年閏十月二十四日には定家は左近衛権中將に昇任している。建永元年(二二〇六)三月二日に執政の「臣」在任中に九条良経が急逝する。その二年前の元久元年(二二〇四)十一月二十六日条には「念ぎ法性寺に渡らむと欲す。」とあり、父の俊成が危篤に陥る。その五日後の三十日条に、

夜中に、雪を尋ね出して献ず。殊に悦喜ばしめ給ひ、頻りに之を召す。其の詞、めでたき物かな。猶之を召す。おもしろきものかなと。(中略) 申して云ふ。さらば念仏して、極楽へまいらむと思し食せと。又、頷かしめ給ふ。

とみえる。定家は真摯な浄土信仰心を発露させて父の最期を看取つてもいたのであった。

定家にとって、この時期は定家の人生の節目であり、法性寺は特別の空間の意義があつたことになろう。

良経の一周忌で詠じていた二六七三番歌「いはへどもわがため露ぞこぼれそふ藤のさかりを松はふりつゝ」の下句「藤のさかり」は、「良経殿下の御子孫の繁栄」の披瀝であつたことになると同時に次のようなことも繋がってくる。それは、四半世紀後の貞永元年（一二三三）十月四日に道家の女の嬪子から生誕した親王は八十七代四条天皇として即位し、道家の三男の九条頼経も寛喜二年（一二三〇）十二月九日に結婚して名実ともに四代鎌倉将軍として時めいている。執政の「臣」として良経の嫡男の道家が治世を領導しているので、歌の「藤のさかり」が現実になつた。十九歳の定家が『明月記』（治承四年三月三〇日）に法性寺に赴いて見た「藤の花」は、半世紀を経過して見事に咲き誇つている治世に定家は身を置いている。この時期に『治承物語』を六巻本に再編するための慈円周辺圏を道家は主導するのであった。

日本の文化や歴史を背景に自然の生み出したフレグランスや茶道の普及につとめている宮沢敏子が、

藤蔓がまるで恋人に寄り添うかのように松の枝に絡まる光景は、松を男性、藤を女性の象徴として古来より歌に詠まれ画に描かれてきました。昔から大好きだった藤の花。優雅で雅な植物と思つていたその印象を一変させたのは、奈良の都で出会った山藤でした。（中略）ふと頭上を見上げると野生の山藤が太い幹をよじらせ、大蛇のように巻きついていてではありませんか。（中略）心を落ち着かせてゆつくり歩を進めると、栄華を誇つた藤原一族の歴史が蘇ってきます。身をよじらせて蔓を伸ばし誇らしげに花垂れる春日の山藤。千年もの樹齢を重ねたと伝えられるそれは、楚楚とした藤の印象を一変させるものでした。しかしまた、生命力溢れるたくましい姿に感動を覚えたのも事実で、美しいだけではない藤という植物の真の姿に私はようやく巡り会えたのかもしれない。^{〔註5〕}

と述べている。現在の整備された情況でありながら、施線の「大蛇」・「生命力溢れるたくましい姿」と評価して讀んでいる藤の花をめぐる言説そのものに着目したい。同時に二重施線部の藤原鎌足を祖とする一族の波線の「千年」

という歴史時間にも顧慮してみよう。『古事記』(中巻)に、

また昔、新羅の国王の子ありき。名は天之日矛といふ。この人參渡り来ぬ。(中略)難波に留りき(こは難波の比売^{ヒセ}會^ケの社^ヤに坐す阿流比売の神といふ)。(中略)かれ、その天之日矛の持ち渡り来し物は、玉つ宝といひて、珠二貫。(中略)八種ぞ(こは伊豆志^{いづし}袁登売^{をどめ}の神坐しき。かれ、八十神この伊豆志袁登売を得むとすれども、みな得はず。ここに、二はしらの神あり。兄は秋山^{あきやま}之下氷壯夫^{したひをとこ}と号ひ、弟は春山^{はるやま}之霞壯夫^{のかすみをとこ}と名ふ。……

天之日矛が新羅から渡来して摂津国東成郡比売許會社に立ち寄り、住んだ。^{〔註96〕}二連の緒に繋がっている八つの玉を持ってきた。これが八前の大神である。この神の娘に多く男神が言い寄っていたが結婚できなかった。秋山之下氷壯夫と春山之霞壯夫の兄弟も言い寄る。兄も相手にされなかったので、母が弟には「ふぢ葛^{くさ}を取りて、一宿の間に、衣・褌^{したくつ}また襪^{はく}・沓^{くつ}を織り縫ひ、また、弓矢を作りて、(中略)その嬢子の家に遣はせば、その衣服また弓矢^{まきはひ}ことごと藤の花に成りき。ここに、その春山之霞壯夫、その弓矢をもちて、(中略)その屋に入るすなわち婚しつ。」となつたとの説話が載っている。二重施線から藤の花には、上代より「武」の側面も具有しているとの認識もあったことにもなるう。

『古事記』は人皇初代の神武天皇より四十三代目の元明天皇の命をうけて太安萬侶が編纂したわけであるが、その治世で事実上最高実力としての地位を確立したのが鎌足の子の藤原不比等であり、不比等の次男の房前こそが藤原北家の祖である。房前の十二代後が慈円の父が、法性寺の丘陵に葬られている忠通なのである。法性寺関白忠通すなわち「法性寺殿」と通称されており、『愚管抄』に「コノ中二白河院人、知足院ド、ヲヒシト中アシクモテナシテヲヒコメテ、ソノ知足院ノ子法性寺殿ヲ別ニトリハンツヤウニツカヒタテサセ給タル御ヒガ事ノ、ヒシト世ヲバウシナヒツルニテ侍ナリ。」(巻七—三三九ページ)と叙述している。忠実と忠通とが対立することによって廟堂を混乱し、保元の乱勃発を誘発していく一因となり、慈円は「武者ノ世」へ推移させていく。その直前の『愚管抄』をみておこう。白河院は後三条天皇の第一皇子であった。後三条天皇退位後の事象をめくって、

延久四年十二月八日御讓位ニテ、同五年二月廿日住吉詣トテ、陽明門院グシマイラセテ、関白御トモシテ、天王寺・八幡ナドヘマイリメグラセマイラセタマイケリ。住吉ニテ和歌会アリテ、御製ニハ、

イカバカリ神モウレシト思フランムナシキ船ヲサシテキタラバトアリケリ
トアリケリ。ソノ中ニ經信ノ歌ニ、

ヲキツ風フキニケラシナ住吉ノ松ノシツエアラウシラ浪

トヨメルハコノタビナリ。

(卷四——一八八〇八九ページ)

と慈円は叙述している。『古事記』の前掲した波線部の比売許會社(『延喜式』神名帳の摂津国住吉郡の条、古伝に照らして住吉社とは関連するか、同系統。)とも呼応するので、既述したように經信を高く評価している定家は、後鳥羽院の長久を寿いで、

わが道をまもらば君をまもらんよはひはゆづれ住吉の松

(七三九)

と詠じていた。七三九番歌を『愚管抄』の後三条天皇と經信との二首の歌とをも併せながら、四条天皇の在位する治世で組織される慈円周辺圏では「武者ノ世」を如何に描いていったかを、あらためて窺つていこう。

治承・寿永年間の武力衝突に決着がついた文治元年(一一八五)から同四年の社稷神參詣までを『愚管抄』で、

頼朝関東ヨウヤウくニメデタク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。去年

十月廿八日二嫡子ノ良通大納言大将ハ、任内大臣、大饗イミジクヲコナイナドシテ、同四年正月二春日マ

ウデセラレケリ。

(卷六——二七三〇七四ページ)

としている。当該の文章直前には摂政に就いたので「前途ニハ必ズ達スベキ告アリテ、十年ノ後ケフマチツケル」と兼実は感慨にふけたとあった。右文では、治世が安穩なつたので冥衆に祈請していたからであるとの意図のもとに、施線で平家軍を征伐した頼朝を礼讃し、文治四年(一一八八)正月二十七日、兼実の嫡男の良通が、社稷神すなわち我が氏神の春日社へ參詣(『玉葉』)したことをも二重施線で併記したのは、摂政就任の二年前の『玉葉』寿永三年(一一八四)三月十八日条に良通のみた夢を記し、

余 この夢の意を案ずるに、今月末来月の始め、この事成就すべきか。所以何となれば、古歌に云はく、なつにこそさきかゝりけれ藤のはな松にとのみも思ひけるかなと云々。仍つて春の末夏の首に成就すべきの徴なり。

として、「夏にこそ咲きかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひける哉」(『拾遺和歌集』巻二・夏)をもとに兼実は自己の今後を予想していたからでもある。治承四年(一一八〇)三月四日に「吉夢を告ぐ。信ずべし」(『玉葉』)と記載していた夢が符合したわけである。

既述したように良経の一周忌があつた承元元年(一一〇七)三月七日に二六七三番歌の下句で「藤のさかりを松はふりつつ……」と定家は詠じていた。同年二月三日に、これも強調したように定家は『治承物語』の創出される西山の善峯寺に出向いる。其の時より、十年余り経過した治世で良経の嫡男の道家を外祖父とする四条天皇が即位する。当該歌の上の句で「私のためには露がこぼれます」と詠じていた悲嘆が、百八十度転回する。頼朝が旗揚げする五ヶ月以前の治承四年三月四日に『玉葉』に兼実が刻んだ「吉夢」は、さらに半世紀を経て、孫の道家の世で完全に符合した。九条家の三代の家運を弁えている定家は、靈夢に驚嘆したのであろう。

道家から九番目の勅撰集の「編纂」を下問された定家は、『明月記』貞永元年(一一三三)六月十三日条に「今、故に筆を染め、甘巻の草案の端を書く」とあつて、勅命が下り、『新勅撰和歌集』の「編纂」に直ちに着手する。文暦二年(一一三五)三月十二日条に、

之を送り遣す。仍て清書の甘巻(冠絵の簪に入る)・草甘巻、大殿に持ち参じ、之を進らせ入る。此の事已に果し遂ぐ。悦びに思し召す仰せらるといへり。此の事を聞き、心中殊に悦びに感じ、即ち帰ると云々。

とあるので、道家は喜悅した。その一班は本歌集の仮名序を括る一節に次のように刻まれた。すなわち、きみのよをいはひたてまつり、人のくにおさめをこなひ、神をうやまひ、ほとけにいのり、をのがつまをこひ、身のおもひをのぶるにいたるまで、部をわかちまきをさだめて、はまのまさごかずくに、うらのたまものかきあつむるよし、貞永元年十月二日これをそうす。なづけて新勅撰和歌集とすといふことし

かなり。

とあるから、本章(十一)の文章の冒頭に掲出した『愚管抄』に説かれている仏法王法相依の道理・「冥顯二法」の道理に則っている。『愚管抄』を熟読している道家は、本歌集を定家が「^{〔註97〕}編纂」し終えた二年後の嘉禎三年(二二三七)頃から仁治元年(二四〇)にかけて法性寺の空間に慈円周辺圈を組織した。^{〔註97〕}再三、述べてきているように『治承物語』を六巻本に再編されていく。その六巻本『治承物語』の祖本の延長線上にあるのが延慶本なのである。^{〔註98〕}いったん都を出た平忠度は引き返して藤原俊成に家集を託した物語の章段の後に、

左馬守行盛モ、幼少ヨリ此道ヲ好テ、京極中納言ノ宿所ヘ、行盛常ニオハシ昵テ、偏ニ此ノ道ヲノミタシナミケリ。定家卿、其比ハ少將ニテオハシケリ。サルホド二一門ヲ落シ時、日來ナゴリヲ、シミテ、ナニトナクヨミヲカレタリケル歌共ヲ書集テ、「後ノ思出ニモ」トヤ思ワレケム、文ヲコマカニカイテ、袖ガキニカウゾカ、レタリケル。

ナガレテノ名ダニモトマレユクミヅノアハワレハカナキミハキエヌトトモ

定家ノ少將、此歌ヲ見給テ、感涙ヲ流シテ、「若撰集有バ、必ズ入ム」トゾオボサレケル。(中略)後堀河院ノ御時、新勅撰ヲ被レ撰シトキ、(中略)「左馬守行盛」ト名ヲアラワシテ、此歌ヲ被レ入タリケルコソ、ヤサシクアワレニオボヘシカ。

(三末・三〇「行盛ノ歌ヲ定家御入新勅撰事」)

との章段が付加される。その後、壇ノ浦海戦で「小松新三位中納言資盛、同少將有盛、従父兄弟左馬頭行盛、三人手ヲ取組、海ニソ沈ミ給ケル。」(屋代本・卷一一「平家一門悉皆滅亡事」)で従兄弟の平資盛・有盛と手を組んで入水したことが、再編された六巻本『治承物語』に平忠度の別離に併せて描かれるのである。行盛の歌は『玉葉和歌集』・『月詣和歌集』等にも採られており、歌の嗜みの深い武士であった。^{〔註99〕}『新勅撰和歌集』(卷一七・雑歌二)に、

寿永二年、おほかたの世しずづかならず侍しころ、よみかきをきて侍ける歌を、定家がもとにつかはすとて、つゝみがみにかきつけ侍し

ながれての名だにもとまれゆくみづのあはれはかなき身はきえぬとも

(二一九四)

と採られている以上、法性寺の慈円周辺圏に参画している定家が付け加えて、潤色したであろう。そのことは、周知のように『兵範記』紙背にあつた延応二年（二二四〇、同年七月に仁治に改元）七月十一日付消息に、

治承物語六局 号平家、此間書写候也、未_二出来_一者、可_レ入_二見参_一由、存候

とあつて、「平家」と号した六巻の物語を書写し、既に完了していると報じた。この消息は辻彦三郎が「定家の書写能力の一端を示す（中略）定家は七十歳に近づく両手が不自由で（中略）更に足や腰も不自由なつた。それでもなお諸書の書写及び写経を続けた」と指摘している。〔註四〕確かに定家の周辺には六巻本『治承物語』が存在していた。慈円圏で創出された「頼朝の物語」を内実とする『治承物語』が、「平家の興亡の物語」へ再編するための「武者ノ世」以降の記録が収集され、法性寺で「編纂」されていたのである。

十九歳の時に「今日より法性寺華亭に移り坐す。広博、たまたま適々心緒を慰む。」（『明月記』治承四年五月三日）とあるように定家は、施線にあるように「華亭」として、美しく趣向を凝らした付まいに心を慰めていた。源平争乱が終結して世が落ち着いて文治五年（一一八九）春、前年に慈円が「紫の雲にぞまがふ藤花つひの迎へを松にかゝりて」（七一九）と詠じたのに和して定家は、「奉和無動寺法印早卒露胆百首」で、

おもふかな猶うとまれぬ藤の花さくより春のくるゝならひに

（四一八）

「藤の花」は好きだが厭わしくもある、それはお前が咲くと春が暮れていくからで、それも世の習わしだと、慈円の七一九番歌の臨終に極楽浄土から来迎に伴う紫雲が棚引くとの句をもとに、仏教の根本思想の諸行無常を詠じた。これは本物語に通底しているのは周知のとおりである。

「藤の花」にある瑞祥的・信仰的そして尚武的側面が藤〔註四〕原北家の家風の古層に連綿として受け継がれており、それが折に触れて、定家のパトスの噴出をもたらすのであつた。縁戚関係にある坂東武士の蓮生の求めにより、「編纂」する契機となつた『小倉百人一首』には、遍照の「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよをとめの姿しばしとどめむ」との歌を定家は選んだわけだが、遍照には、

よそに見て歸らむ人に藤の花はひまつわれよ枝は折るとも

（『古今集』一一九）

「藤の花よ、蔓で彼女らに絡まって、まとひついてやれ。たとえば枝が折れようとも。」との「生命力溢れるたくましい姿」の歌があるのは看過できない。

慈円周辺圏が法性寺に嘉禎三年（一二三三）に組織される直前の貞応年間（一二三二―三四）に「編纂」された『六代勝事記』には、流麗な文章で平家一門の西海漂泊の場面が描かれている。久保田淳は「『六代勝事記』の作者が誰であるかという問題については、なお保留したい。」としながらも、「また他ならぬ定家によって書かれても当然であったと考える。」と論じていることを添えておきたい。^{〔註四〕}

『古事記』編纂の往時に権勢を誇った藤原不比等の次男である房前が、藤原北家の祖である。その直系の九条家に仕えている定家は、『平家物語』初期生成に関与する恰好の人であったことになろう。

〔引用資料の典拠〕

〔末尾〕

『愚管抄』・『慈鎮和尚自歌合』は『日本古典文学大系』（岩波書店）、『玉葉』は高橋貞一著『訓読玉葉』（高科書店）、『明月記』は今川文雄『訓読『明月記』、定家の和歌は『藤原定家全歌集』（筑摩書房）、『栄花物語』・『松浦宮物語』・『無名草子』は『新編日本古典文学全集』（小学館）、覚一本『平家物語』・『万葉集』は『新日本古典文学大系』（岩波書店）、延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』（新典社）、『今鏡』・『後拾遺和歌集』・『建礼門院右京大夫集』は『講談社学術文庫』、慈円の歌類は『拾玉集』（明治書院、『物語二百番歌合』は『王朝物語秀歌選』（岩波書店）、『久安百首』・『長秋詠藻』・『続後撰和歌集』は『新編国歌大観』（角川書店）、『新勅撰和歌集』（岩波書店）、『古来風躰抄』・『詠歌大概』・『近代秀歌』・『毎月抄』は『日本古典文学全集』（小学館）、『法然上人伝』は『法然上人絵伝』（岩波書店）、『熊野道之間愚記』は『国宝熊野御幸記』（八木書店）、『大日本国法華経験記』は『往生伝 法華験記』（岩波書店）、『百鍊抄』は『新訂増補 国史大系』（吉川弘文館）、『古事記』は『新潮日本古典集成』（新潮社）。

註

〔53〕『平家物語』脚注・一二（『新日本古典文学大系 上』岩波書店）六八ページ

〔54〕註〔43〕の同書補注「列祖相承の名を記した文章がおだやかなのである。」二三五ページ

〔55〕『言泉集の位置——雑談集・平家物語との関連において——』（『国文学踏査』第八号・一九六八年二月）なお、清水宥聖は永井

義憲と共に『言泉集』等の詳しい校注・索引を手掛けている(『安居院唱導集 上巻』角川書店・一九七二年)。

- [56] 牧野和夫は「慈円の認識は、既に天台の内部、足元の安居院の唱導の「場」において実践活用されていた現況に立脚したものであり、慈円独特の時代に先じた認識と言いつけることは難しくなるのである。」と論じ、『平家物語』成立時期以前に、安居院澄憲の机上の周辺には、「合戦文体(とくに「騎射」の場面)を存分に駆使しえる環境が整っていたことになる。(中略)源平の合戦後の余燼消えやらぬ頃に既に安居院聖覚が「軍記物語」的な合戦文体を巧みに活用していた(中略)『徒然草』二二六段の一部(弓馬のことと東国)も改めて顧慮されるのである。」と指摘している(『親快記』という窓から——中世初期の説教資料に関する一、二の問題——)(『中世文学』第三二号・一九七八年五月)。

- [57] 今川文雄『明月記人名索引』(初音書房・一九七二年)

- [58] 第二章 四七「悲運の大將軍物語の構想」(『平家物語の全体像』和泉書院・一九九六年)二四八ページ

- [59] 第三章 中世の美学・美意識(『平家の歌人たち』角川書店・一九八四年)一五三〜五五ページ

- [60] 「後鳥羽院の熊野御幸と和歌——「熊野御幸」の和歌表現——」(『文学』第一巻第四号・二〇〇〇年七月・八月)

- [61] 「第一章 和歌史における新古今集」(『新古今集とその歌人』角川書店・一九八三年)三七〜三九ページ

- [62] 根井浄「蟻の熊野詣」(『観音浄土に船出した人びと・熊野と補陀落渡海』吉川弘文館・二〇〇八年)一五ページ

- [63] 『評註建礼門院右京大夫全集全釈(改訂版)』武蔵野書院・一九七六年 一四六〜四九ページ

- [64] 松本寧至「追憶に生きる建礼門院右京大夫」『新典社』一九七六年 一〇九ページ

- [65] 小山靖憲は「ネットワークを通じて、檀那を獲得した。(中略)湛増は田辺に居をかまえ、のちには熊野水軍を率いて源平内乱の屋島・壇ノ浦の合戦に名をなすが、(中略)田辺において美麗の御所や広い宿所を設けたのは、権別当湛顕(湛増の子、快実の父)なので、おそらく彼が御師であったと思われる。」としている(『熊野古道』岩波書店・二〇〇〇年)九〇〜九一ページ。土谷恵「後鳥羽院の熊野御幸」(『国宝 熊野御幸記』八木書店・二〇〇九年)では「師」は「覚了房阿闍梨」とする説もあるが、やはり「吉記」の「三鍋」から、路次の「御師」への心遣いであって、湛顕とみておきたい。

- [66] 宮家準「熊野修験」吉川弘文館・一九九七年 三一ページ

- [67] 高橋修「別当湛増と熊野水軍——その政治史的考察——」(『ヒストリア』第一四六号・一九九五年一〇月)

- [68] 宮家準「熊野修験」吉川弘文館・一九九七年 二二ページ

- [69] 源健一郎「平家物語の「熊野別当湛増」——「熊野新宮合戦」考——」(『中世軍記の展望台』和泉書院・一九九七年)

- [70] 註(69)の同論文

- [71] 註(67)の同論文

- [72] 李凌「定家と蓮生の親交——二組の贈答歌の視座から——」(『大東文化大学 日本文学研究』第五三号・二〇〇二年二月)
- [73] 「為家室頼綱女とその周辺」(『和歌文学の伝統』角川書店・一九九七年)
- [74] 「為家室頼綱女とその周辺(続)」(『中世文学研究』第二四号・一九九八年八月)
- [75] 拙著「第Ⅱ部 付章 宇都宮入道蓮生の位置」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年) 五二二ページ
- [76] 「牧の方の出身と政治的位置——池禪尼と頼朝と——」(『古代・中世の政治と文化』思文閣出版・一九九四年)
- [77] 註「[76]と同じ」。
- [78] 拙著「第七章 治承物語と西山の空間」・第十一章 兼好の平家物語成立に関する伝聞的考証」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)
- [79] 「第二章 血脈的系譜」(『藤原俊成 人と作品』角川書店・一九八二年) 八九〜九八ページ
- [80] 註「[7]の同書」[第Ⅱ部 付章 補論 物語化される梶原景時]
- [81] 註「[7]の同書」[第Ⅱ部 第七章 治承物語と西山の空間]
- [82] 註「[7]の同書」[第Ⅱ部 第八章 治承物語の復元]
- [83] 本位田重美『礼門院右京大夫集全釈(改訂版)』武蔵野書院・一九七六年 二八一ページ
- [84] 註「[7]の同書」[第Ⅱ部 第九章 再編された六卷本治承物語と九条道家]
- [85] 山本一「第二章 信仰と速詠——『厭離百首』と『住吉百首』——」(『慈円の和歌と思想』和泉書院・一九九九年)
- [86] 註「[84]と同じ」。
- [87] 註「[82]と同じ」。
- [88] 堀川貴司「『元久詩歌合』について——「詩」の側から——」(『国語と国文学』第七一卷第一号・一九九四年一月)
- [89] 註「[7]の同書」[第Ⅱ部 第八章 治承物語の復元]・[第Ⅱ部 第十一章 兼好の平家物語成立に関する伝聞的考証]
- [90] 辻彦三郎「『藤原定家明月記の研究』(吉川弘文館・一九七七年) 二八ページ
- [91] 註「[44]の同論文
- [92] 明月記研究会「『明月記』(治承四年)を読む」(『明月記研究』4号・一九九九年一月)
- [93] 註「[92]の同論文
- [94] 「九条家と法性寺——忠通から良経へ——」(『語文』第七九号・二〇〇二年二月)
- [95] 「日本の香りと室礼——伝えていきたい美しい文化——」(『八坂書房』二〇一九年) 七一〜七五ページ
- [96] 『延喜式』(巻九・神祇九 地名上)「撰津国七十五座 東生郡四座」に「比売許會神社」(『神道体系・古典編十一・延喜式(上)』

神道体系編纂会・一九九一年・三〇九ページ）とある。

[97] 註〔7〕の同書「第Ⅱ部 第九章 再編された六卷本治承物語と九条道家」・「第Ⅱ部 第十章 證空と法性寺の空間」

[98] 註〔7〕の同書「第Ⅱ部 第十章 證空と法性寺の空間」

[99] 千草聡「『平家歌人の詠歌小考』——資盛、通盛、行盛らをめぐる——」（『福岡教育大学紀要』第五一号・二〇〇二年二月）

[100] 註〔90〕の同書二二六ページ

[101] 法性寺を建立した藤原忠平の四代後が頼通、長男の忠実・孫の頼長と結託して忠実の長男の忠通（慈円の父）と抗争したのが保元の乱。その前夜の太政大臣頼通の領導している廟堂の歌合の模様を『栄花物語』（根あはせ）に、「同じ藤の匂に、紅の打ちたる、藤の二重文の表着、同じ色の無紋の唐衣、池の藤浪唐衣には咲きかかりけるを、歌絵にいとをかしうかきたり。」（五六）とある。『藤の花』を桂に染め抜いたり、家紋や絵に描いたりして、固定してきていた。ことに家紋には、瑞祥的・信仰的等と共に尚武的なことを表示している（樋口清之『家紋』秋田書店・一九六九年・二二～二三ページ）。平家軍が赤旗を軍旗に掲げたのは、『古事記』編纂の時の天皇より三代前である天武天皇在位の壬申の乱を柿本人麿がうたった歌に「ささげたる旗のなぶきは冬こもり春さり来れば野ごとにつきてある火の……」（『万葉集』巻一・一九九）とあるように士気を鼓舞するものであったから、平家軍は、その伝統を先取りして用いた。前掲したように定家は「いはへどもわがため露ぞこぼれそふ藤のさかりを松はふりつゝ」（二六七三）では、「松」にこもる祝意を重ねて九条道家らの繁栄を詠じた。一方、最新の植物科学研究によると「香りを巧みに使って危険を察知し、お互いに知らせ合い、（中略）異種の植物種間が香りを介したコミュニケーションができる」ことが判明した（塩尻かおり「植物の香り戦略とそれを利用した農業技術」〈香料』第二八四号・二〇一九年二月〉）。確かに『古事記』の説話が語る「藤の花」の神秘性とも呼応してくる。鋭敏な感性をもっている定家も二六七三番歌では、「松」と「藤」とに、そのようなことを感得して修辭に用いたと思われる。十九歳より定家が仕えてきている九条家の家運の変動に応じて「藤の花」を重ねる情念が、歌や『明月記』そして慈円・慈円周辺圏での物語創出や再編に露呈していった。

[102] 「三 4 承久の乱以後の藤原定家——『明月記』を読む」（『藤原定家とその時代』岩波書店・一九九四年）二八〇ページ・弓削繁が「延慶本が『勝事記』を座右に置いて引き写したと見て誤りが無いであろう。」と論じているのも定家が慈円周辺圏に参画していた証憑と推定される。（『六代勝事記の成立と展開』（風間書房・二〇〇三年）一四四ページ）

〔付記〕

『新古今歌人の研究』（東京大学出版会・一九七三年）を公刊した久保田淳は、同年に「『西山めぐり』前後のこと」（『雑

談集』(三弥井書店)の附録「中世の文学」との標題のもとに、次のような文章を綴っている。すなわち、

……勝尾寺は西山の山懷にある、西行ゆかりの寺である。花のない季節の花の寺とは、すさまじきものかもしれないが、たたずまいはいい。(中略)それから、大野原神社。参道の傍に清和井の清水がある。マメツタがさびた水を覆っていた。

善峯寺は、車を降りてから少々九十九折めいた道を登る。山門の立派な、大きなお寺である。慈円も籠ったことのあるお寺である。登るとかなり眺望がきく。西山の深さを始めて知った。

西山沿いには竹林が多い。……

とある。慈円圏の空間を見事に観望し、施線のように久保田淳は「西山の深さ」を感得していたことをも、補足しておこう。

○

本論文は、「軍記・語り物研究会」(二〇一九年四月二十六日 於 青山学院大学)における口頭発表をもとにしたものである。その時の有益な質問・意見を参考にしてまとめた。

